

照葉狂言
泉鏡花作

目次

鞠唄
仙冠者
野衾
狂言
夜の辻
假小屋
井筒
重井筒
蜂の堂

二坪に足らぬ市中の日蔭の庭に、よくも恂う生ひ
 立ちしな、一本の青楓、堀の内に年経たり。然るも
 老木の春寒しとや、枝も幹も唯日南に向ひて、戸の
 外にはかり茂りたれば、廣からざる小路の中を横ぎ
 りて、枝さきは伸びて、やがて對向なる、二階家の
 窓に達かんとす。其窓に時々姿を見せて、われに笑
 顔向け給ふは、うつくしき姉上なり。

朝な夕な、琴弾き給ふが、われ物心覺えてより一
 日も斷ゆることなかりしに、わが母みまかり給ひし
 日より弗と止みぬ。遊びに行きし時、其理由問ひた
 るに、何故と云ふにはあらず、飽きたればなりとの
 たまふ。然れど彼家なる下婢の、密に其實を語りし
 時は、稚心にもわれ嬉しく思ひ染みぬ。

「其はね、坊ちゃん、あの何ですつて。あなたの
 母様がおなくなり遊ばしたのを、御近所に居な

がら鳴物も如何な譯だつて、お嬢様が御遠慮を遊ばすんでございますよ。」

其隣家に三十ばかりの女房一人住みたり。兩隣は皆二階家なるに、其家ばかり平家にて、屋根低く、軒もまた小かなりければ、大なる凹の字ぞ中空に描かれたる。此の住居は狭かりけれど、奥と店との間あひだ一の池ありて、金魚、緋鯉など夥多養ひぬ。誰が飼ひはじめしともなく古くより持ち傳へたるなり。近隣の人は皆年久しく住みたれど、其處のみは屢々家主かはりぬ。さればわれ其女房とは未だ新らしき馴染なれど、池なる小魚とは久しき交情なりき。

「小母さん／＼。」

此時髪や洗ひけん。障子の透間より差覗けば、膚白く肩に手拭を懸けたるが、奥の柱に凭り掛れり。

「金魚は、あの内に居るかい。」

「居ますとも、何故今朝ツから被入しやらないツて、待つてるわ、貢さん。」

「然う。」

「あら、然う、ぢやありません、お入りなさいよ、一寸。」

「だつて開かないもの、此戸は重いねえ。」

手を空さまに、我が丈より高き戸の引手を押せば、
がた／＼と音したるが、急にずらりと開く。婦人は
上框に立ちたるまゝ、腕を延べたる半身、斜に狭き
沓脱の上に蔽はれかゝれる。其袖の下を搔潜りて、
衝と摺抜けつゝ、池ある方に走り行くをはた／＼と
追ひかけて、後より抱き留め、
「何故さうですよ。金魚ばかりせつついて、此の
兒は。私ともお遊びつては、厭かい。」
と微笑みたり。

「うむ。」

「うむ、ぢやありません。那樣ことをお言ひだ
と私や金魚を怨みますよ。そして貢さんのお見えな
さらない時に、焼火箸を押着けて、ひどい目に逢は
せて遣るよ。」

「厭だ。」

「それぢや、まあお坐んなさい。そしてまた手鞠

歌を唄つてお聞かせな。あの後が覺えたいからさ。
何といふんだっけね。・・・二兩で帶を買つて、
三兩で紵けて、二兩で帶を買つて、それから、三兩
で紵けて、然うして何うするの、三兩で紵け
て・・・」

「今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱き留
められて。」

とわれは節つけて唄ひ出しぬ。

婦人は耳を澄して聞く。

「寺の和尚に抱き留められて、止しやれ、放しや
れ、帯切らしやるな。」

「おや、お上手だ。」と障子の外より誰やらむ
呼ぶ者ありけり。

「誰？」と言ひかけて走り出で、障子の隙間より戸外を見しが、彼は早や町の彼方に行く、其後姿は、隣なる廣岡の家の下婢なりき。

「貢さんが、お上手だもんだから。立つて聞いたの。其はね、唄も節も全て私たちの知つてるのと違ふんだもの。もつと聞かして下さい、後でまた昨日の續きのお話を上げますから。」

此婦人、昔話の上手にて、稚きものにも能く分るやう、可哀なる、をかしき物語して聞かす。何時もおもしろき節にて止めては、明くる日其續きをと思ふに、先づわれに鞠歌を唄はしむるなり。

「高い縁から突き落されて、笄落し、小枕落

し………」

と唄ひ續けつ。頭を垂れて聞き果てたり。

「何だか可哀つばいのね。鬱いで来るやうだけれ

ど、飛んだおもしろいよ。私たちの覺えたのは、内
方袖方、御手に蝶や花、どうやどうんど、／＼、一
丁、二丁、三丁、四丁ツて最う陽氣なことばかりで、
譯が解らないけれど、貢さんののは又格別だねえ。難
有うござんした。それでは丁ど隙だし、昨日のあの、
阿銀小銀のあとを話してあげませう。」
とて語り出づる、大方の筋は繼母の其の繼しき兒
に酷きなりけり。

「昨日は何處まで話しましたツけね、然う／＼、
然うするとね、貢さん、妹の小銀と云ふ子が感心ぢ
やありませんか。今の母様の子で、姉様の阿銀とは
お肚が違つて居るのだけれど、それは／＼姉おもひ
の優しい子で、姉様が繼母の惡だくみで山へ棄てら
れると云ふのを聞いて、どんなにか泣いたらう。何
てツて頼んでも、母様は肯入れないし、父様は旅の
空。家來や小者は最う悉皆が母様におべつかツてる
んだから、誰一人執成してくれようと云ふものはな
し、為方がないので、そつとね、姉様が冤の罪を被
せられて――昨夕話したツけ――冤といふ
のは何にも知らない罪を塗りつけられたの。納屋の

中に縛られて居る處へ忍んで逢ひに行つてね、言ふやうには、姉さん、私がどんなにか母様に頼んだけど、何うしても堪忍しませんから、一旦連れられておいでなさいまし。後でまた何うにでもしてお助け申ませう。而して、被在ツしやる處が解らないでは、お迎ひに行くことが出来ませんから、是を……ツて、然う云つて、胡麻を一掴み、姉様の袂へ入れてあげたの。行く道々、中の絶えないやうに、そこいらに撒いておいでなさい。其をたよりにして逢ひに行くツて、まあ、賢こいぢやアありませんか、小銀はやう／＼九つ。

其晩は手を取りあツて、二人が泣いて別れて、明日になると、母様の眼を忍んで小銀が裏庭へ出て見ると、枝折戸の處から、點々づあ、あの昨夜の胡麻が溢れ出して、細い、暗い、背戸山の坂道へかゝつて居るのを、拾ひ／＼、ずツと／＼、遠い／＼、路を歩いて、淋しい山の中へ入つて行つたの。然うするとね、新らしく土を掘りかへした處があツて、搔寄せたあとが小高くなツて、其上へ大きな石が乗ツけてあつて、其處まで小銀が辿つて行くと、一條

細ほそうく絶だえ々に續つゞいて居ゐた胡麻ごまのあとが無なくなつて居ゐたでせう。

もう疑うたがふことはない。姉ねえ様は此この中に埋いれられたな、と思おもひながら、姉ねえさん、姉ねえさん、と地つちに口くちをつけて呼よんで見みても返へん事じがないから、はツと思おもつて、泣なき伏ふして、耳みみを恚いかう。」

言いひかけて婦人をんなは頭かうへを傾かたむけ、顔かほを斜ななめに眼めを瞑ねむりて手てを其その耳みみにあてたるが、「ね。」とばかり笑ゑが顔ほさ寂びしく、うつとりと眼めを開ひらきてわが顔かほをば見みし。戸おも外てには風かぜの音おと、さら／＼と、我家わがいえなる彼かの楓かへての葉はを鳴ならして、町まちのはづれに吹ふき通とほる、四角らつかどあたり夕戸ゆふとで出での油賣あぶらうる聲遙こゝろはるかなり。

一しきり窓あかるく、白き埃見えたるが、早ものに紛れてくらくなりぬ。寂しくなりたれば、近寄りて婦人の膝に片手突きぬ。彼方も寒くなりけむ、肌を入れつ。片袖を掛けてわが背を抱きて蔽ひながら、顔さし覗く状して、尚ほ肅かにぞ語れる。

「然うすると、深い／＼、下の方で、幽に、姉の阿銀がね、貢さん、（あゝい。）てツて返事をしましたとさ。

それからまた精一杯な聲で、姉さん／＼ツて呼んだの。然うすると、あゝ、もう水が出て、足の裏が冷たくツて／＼、と姉さんがお言ひだとな。土を掘つたのだもの、水が出ますわ。

何うぞして、上の石を退けて出して進げようとお為だけれど、大きな男が幾人もかゝつて据ゑたものを、何うして小銀の手に合ふものかね。そちこちするうち日が暮れさうだから、泣き／＼其日は歸つてしまつて、翌日また尋ねて行つて、小銀が（小銀

が來ましたよ、小銀が來ましたよ。姉さん、姉さん、何處まで水がつかまりました。）ツて、問うたればね、膝まで水がつかまりましたツて、さうお言ひだとき。其あくる日は、もう股の處へついたツて。また其翌日行つた時は、お腹の上まで來たんですとね。而してもう然うなると、水足が早くなつて、小銀が、姉さん、姉さんツて聞く内に、乳の下まで着いたんだよ。山の中は寂りして、鳥の聲も聞えない。人ツ子一人通らうではなし、助けて貰ふわけにはゆかず、といつて石は退けられないし、唯もう切めてのことに、お見舞をいふばかり、小銀が悲しい聲を絞つて。」

此時婦人は一息つきたり。可哀なる此物語は、土地の人口碑に傳へて、孫子に語り聞かず、一種のお伽譚なりけるが、此處をば語るには、誰もかく為なりとぞ。婦人もいま悲しげなる小銀の聲を眞似むとて、聲繕をしたりしなり。

「姉さんや、姉さんや、何處まで水がつかまりました。何處まで水がつかまりました。もう一度顔が見たいねえ！ 小銀が來ましたよう。）ツて、呼んでも

呼んでも返事がないの。もう下で口が利けなくなつたんでせう。小銀の悲しさは、まあどんなだつたらうねえ。叶はないとは思つても、ひよつと聞えようかと、（姉さんや、姉さんや、何處まで水がつかしました。）阿銀さん、姉さんツて、はツと泣き倒れて、姉さん、姉さん。」

と悲しき聲す。先刻より我知らず悲しくなりしを押耐へて居たりしが、もはや忍ばずなりて、わツと泣きぬ。驚きて口をつぐみし婦人は、ひたと呆れし状にて、手も着けでぞ瞻りける。

門の戸引開けて、衝と入りざま、沓脱に立ちて我が名を慌しく呼びたるは、隣家なる廣岡の琴弾く彼の美しき君なり。

「あれ。」とばかりに後にすさりて、後ざまにまた其手を格子戸の引手にかけて、遁も出ださむ身のふりして、面をば赧らめたまへる、可懐しと思ふ人なれば、涙ながら見て、われは莞爾と笑ひぬ。

「まあ私は何うしたといふのでせう。」

かく言ひかけて俯向きたまへり。

「何うぞ、さあ何うぞお入りなさいまし。お嬢様
まことに散らかして居りますが。」

此方も周章てゝいふ。

「はい、まだ染み／＼御挨拶にも上りませぬのに、
失禮な、つい、あの、まあ、何うしたら可うござい
ませう。」

詮方なげに微笑みたまひつ。果は笑ひとこそなり
たれ、わが其時の泣聲の殺されやすと思ふまで烈
しき悲鳴なりしかば、折しも戸に倚りて夕暮の空を
見たまひしが、われにもあらで走入り給ひしなりと
ぞ。されば、わが泣きたるも、一つはこの姉上の母
の、繼母ぞといふことをば、豫て人に聞きて知れゝ
ばなりき。

四

うつくしき君の住ひたるは、わが町家の軒ならびに、比びなき建物にて、白壁いかめしき土藏も有りたり。内證は太く富めりしなりとぞ。人数は少なくて、姉上と、其父と、母と、下婢とのみ、もの靜なる仕舞家なりき。

財産持てりといふには似で、繼母なる人の扮装の粗末さよ。前垂も下婢と同じくしたり。髪は鶺鴒の尾の如きものゝ撥ね出でたる都鬘といふに結びて、齒を染めしが、ものいふ時、上下の齒ぐき白く見ゆる。

年紀は四十に餘れり。われをば睨みしことあらざれど、遊びに行けば餘り嬉しき顔せず。嘗て夜に入りて、姉上と部屋にて人形竝べて遊びしに、油こそ惜しけれ、然ることは日中に為るものぞと叫びぬ。

われを憎むとは覺えず、内に行くことをこそ好まざれ、外にて遊ぶ時は、折々ものくれたり。されど彼の繼母の與へしものに、わが好ましきはあらざり

き。

節句の粽貫ひしが、五把の中に篠ばかりなるが二ツありき。杏、青梅、李など、幼き時は欲しきものよ。廣岡の庭には實のなる樹ども夥多ありし、中にも何とかいふ一種李の實の、またなく甘かりしを今も忘れず。繼母の目のなきひまに、姉上の潛に取りて、兩手に堆く盛りてわが袂に入れたまひしが、袖の振あきたれば、喜び勇みて走り歸る道すがら大方は振り落して、食べむと思ふに二ツ三ツよりぞ多からざりける。

繼母はわづかに柿の實二ツくれたり。其の一顆は澁かりき。他の一顆を味はむとせしに、眞紅の色の黒ずみたる、臺なきは、蟲のつけるなり。熟せしものにはあらず、毒なればとて、亡き母棄てさせたまひぬ。

何時なりけむ、母上の給ひたる梨の、核ばかりになりしを地に棄てしを見て、彼處の繼母眉を顰め、

其重寶なるもの投ぐることは、磨りおろして汁をこそ飲むべけれど、老實だちてわれに言へりしことあり。

さる繼母に養はるゝ姉上の身の思はるゝに、いひ知らず悲しくなりて、かくはわれ小銀の譚に泣きしなる。其理由を語るべき我が舌は餘り稚かりき。

「まあ、恚うなんですよ。お嬢様、ちよつと御覽なさいまし、子供ですねえ。」

女房は笑みつゝ言ふ。其まゝにも出でかねてや、姉上は内に入りたまひ、

「まことに失禮いたしました。私もそゝつかしい、考へたつて解りますのにねえ。小母さん、悪く思召さないで下さいまし、ほんとに何うしよう私は。」
と、ひたすらに詫ひたまひぬ。

此方は只可笑しがりて、

「いゝえ、しかし何ですわ。うつかりした話はいたされませんね。私も吃驚しました、だつて泣きやうが太いのですもの。厭な人ねえ。貢さん、私や懲々

したよ。もう／＼恚麼こんなことは聞かせません。」と
半ばは怨顔うらみがほなるぞ詮方せんかたなき。

「でも賢かしこいのね。貢みつぎさん、よくお解わかりだった。」
と優やさしく頭撫かしらなでつゝ、姉上あねうへの愛めでたまふに、やゝ
面おもてを起おこせり。

「お嬢様びげうさま。」とものありげに戸外おもてより下婢かひの聲こゑ
懸かけたれば、彼かの君きみはいそがはしく辭じし去さりたまひ
ぬ。あと追おうて出いでむとせしを、女房にようぼうの遮かへりて、笑わら
ひながら、

「あら其そのまんまで遁にげちやずるいよ。もうひとつ
手鞠唄てまりうたをお聞きかせてなくツちやあ．．．．」

再ふたゝび唄うたひたり。辭いなみて唄うたはざらむには、うつくし
き金魚きんぎよもあはれまた繼母まははの手に掛かりやせむ。

仙冠者

—

我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

兩側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往來少なかりき。

朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ。

日は春日山の巔よりのぼりて粟ヶ崎の沖に入る。海は西の方に路程一里半隔りたり。山は近く、二階なる東の窓に、彼の木戸の際なる青楓の繁りたるに蔽はれて、峰の松のみ見えたり。欄に倚りて伸上れば半腹なる尼の庵も見ゆ。卯辰山、霞が峰、日暮の

丘、一帯波の如く連りたり。空蒼く晴れて地の上
に雨の餘波ある時は、路なる砂利うつくしく、いろ
／＼の礫あまた洗ひ出さるゝが中に、金色なる、又
銀色なる、緑なる、樺色なる、鳶色なる、細螺おび
たゞし。轍の跡といふもの無ければ、馬も通らず、
をさなきものは懸念なく踞居てこれを拾ひたり。

あそびなかまの暮ごとに集ひしは、筋むかひなる
縣杜乙劍の宮の境内なる御影石の鳥居のなかなり。
いと廣くて地をば綺麗に掃いたり。榭五六本榭五六
本、秋は木犀の薫みてり。百日紅あり、花桐あり、
また常磐木あり。梅、櫻、花咲くは此處ならで、御
手洗と後合せなる彼の君の庭なりき。

この境内と其庭とを、廣岡の繼母は一重の木槿垣
を以て隔てたり。朝霧淡くひとつ／＼に露もちて、
薄紫に薬青く、純白の、薬赤く、あはれに咲重なる
木槿の花をば、繼母は粥に交せて食するなり。こは
長壽する薬ぞとよ。

梨の核を絞りし汁も、木槿の花を煮こみし粥も、

汝が口ならば旨かるべし。姉上にはいかならむ。其姉上と、大方はわれ此處に来て、この垣をへだて、見えぬ。表より行かむは、繼母のよき顔せざればなり。

時は毎に定まらねど、垣根にイめば姉上の直ちに見え給ふ。垂籠めて居給ふ其居間とは、樹樹の梢ありて遮れど、それと心着きてや必ず庭に來給ふは、蟲の知らするなるべし。一時は先立らて園生をそゞるあるきし給ふことあり。然る折には、われ家を出づる時、心の急がざることあらざりき。

行きて差覗けば、悄れて樹の間に立ちて、首をさげ、肩を垂れ、襟深く頤を埋めて力なげにイみたまふ。病氣にやと胸先づ轟くに、やがて目をあげて此方を見給ふ時、莞爾として微笑み給へば、病にはあらじと見ゆ。かゝること屢々あり。

獨居給ふ時はいつも然なりけむ。われには笑顔見せ給はざること絶えてなかりしが、わがために慰めらるゝや、さらば勉て慰めむとて行く。もどかしき

垣かきを中なかなる逢瀬あふせのそれさへも随意まゝならで、ともすれ
ば意地いぢ悪わるき人の妨ひとぐる。

國くに磨まろといふ、舊もとの我わが藩はんの有司いうしの兒この、われより
三ツばかり年と紀したけたるが、鳥居とりゐの突つきあたりなる黒くろ
の冠木門かぶきもんのいと厳いかめしきなかにぞ住すひける。

肩幅かたはゞひろ廣く、胸張むねはりて、頬ほに肥し肉しつき、顔丸かほまるく、色いろの黒くろき少年せうねんなりき。腕力ちからもあり、年とし紀しも長たけたり、門もん閥ぼつも貴たつとければ、近隣きんりんの少年せうねん等らみな國曆くにまろに従したがひぬ。

厚紙あつがみもて烏帽あしほし子つを作りて被かりて、拂はを腰こしに挿さしたるもの、顛はちまき卷まきをしたるもの、十手じつてを携たづねへたるもの、物もの干棹ほしざをを荷になへるものなど、五三人にんさいう左右ひきつに引着ひきつけて、渠かれは常つねに宮みやの階きざはしの正面しやうめんに身構みがまへつ、稻葉いなば太郎たらう荒象園わうせうえんの鬼門おにかどなりと名告なりたり。さて常つねにわが廣岡ひろをかの姉上あねうへに逢あはむとて行ゆくを、など然さは女々めづしき振舞ふるまひする。とにも遊あそべ、なかまにならば、仙冠せんくわん者じやう牛若うしわか三郎ざぶらうといふ美少年びせうねんの豪傑がうけつになさむと言いひき。仙冠せんくわん者は稻葉いなばなにがしの弟あとういにて、魔術まじゆつをよくし、空中くうちゆうを飛ひ行かうせしとや。仙冠せんくわん者をわれ嫌きらふにあらねど、誰たれか甘あまんじて國曆くにまろの弟あとういたらむ。

言いふこと肯きかざるを太いたく憎にくみ、きびしく其手そのて下に命めいじて、われと遊あそぶことなからしめたり。さらぬも近隣きんりんの少年せうねんは、わが袖長そでながき衣きぬを着きて、好よき帶おびしたる

を疎じて、宵々には組を造りて町中を横行しつゝ、
我が門に集ひては、軒に懸けたる提灯に礫を投じて
口々に罵りぬ。母上の名、假名もて其神燈に記され
たり。亡き人に礫打たしては、佛を辱かしまむとて、
當時わが家をば預りたまへる、伯母の君他のに取り
かへたまひぬ。

かゝりし少年の腕力あり門閥ある頭領を得たるな
れば、何とて我威を振はざるべき。姉上に逢はむと
て木槿垣に行く途、まづ一人物干棹をもて一文字に
遮り留む。十手持ちたるが引添ひて眼を配り、願卷
したるが肩をあげて睨め着くる。其中にやさしき顔
の彼の烏帽子被れる兒の拂をば、國麿の引取りて、
背後の方に居て、片手を尻下りに結びたる帯にはさ
みて、鷹揚に指揮するなり。

わびたりとて肯くべきにあらず、しを／＼と引返
す本意なき日數こそ積りたれ。忘れぬは我ために、
此時嬉しかりし楓にこそ。

其枝のさき近々と窓の前にさしいでたれば、廣岡

の彼の君は二階にのぼりて、此方の欄に掴まりたる
わが顔を見て微笑みたまひつゝ、腕さしのべて、葉
さきをつまみ、撓ひたる枝を引寄せ、折鶴、木兔、
雛の形に切りたるなど、色ある紙あまた引結びては
はつと放したまふ。小枝は葉摺れしてさら／＼と此
方に撓ひて來つ。風少しある時殊に美しきは、金紙、
銀紙を細く刻みて、蝶の形にしたるなりき。

雨の日はいかにしけむ、今われ覺えて居らず。麗
かなる空をば一群の鳩輪をつくりて舞ふが、姉上と
われと對ひあへるに馴れて、恐氣なく、此方の軒、
彼方の屋根に颯と下しては翼を休めて、廂にも居た
り。物干場の棹にも居たり。棟にも居たり。みな表
町なる大通の富有の家に飼はれしなりき。夕越くれ
は一齊に埒に歸る。やゝ人足繁く、戸外を往來ふが
皆あふぎで見つ。楓にはいる／＼のもの結ばれたり。

其まゝ置きて一夜を過すに、あくる日はまた姉上
の新たに結び給はでは、昨日なるは大方失せて見え
ずなりぬ。

手届てとどきて人の奪うばふべくもあらねば、町まちの外はうれなる
酒屋さかやの庫くらと觀み世せ物もの小屋こやの間あひだに住すめりと人々ひと々の言いひあ
へる、恐おそしき野衾のふすまの來きて攫さらへて行ゆくと、われはをさ
なき心こころに思おもひき。

其翼そのつばさ廣ひろげたる大おほきさは鳶とびに較たくふべし。野衾のぶすまと云いふは蝙蝠こうもりの百も歳とせを經へたるなり。年とし紀じ六十ろくじゅうに餘あまれる隣となりの扇折あふぎをりの翁おきなが少わかき時ときは、夜毎よごとに其その姿見すがたみたりし由よし、近ちかき年としは一年ひととせに三みたひ、三月みつきに一ひと度たびなど、たま／＼な
らでは人ひとの眼めに觸ふれずといふ。一尾いちびならず、二ふたツ三み
ツばかりあり。普通なみの小ちひさきものとは違ちがひて、夏なつの
宵よひ、夕月夜ゆふつきよ、灯ひとす時とき、黄昏たそがれには出いで來きたらず。初夜しよやすぎ
てのちともすれば其翼そのつばさもて人ひとの面おもてを蔽おほふことあり。
柔やほらかに冷つめたき風ふう呂敷ろしきの如ごときもの口くちに蓋ふたするよと見みれば、
胸むねの血ちを吸すはるゝとか。幻まぼろしの如ごとく軒のきに閃ひらめきて、宮みやな
る鳥居とりゐを掠かすめ、其そのまゝ隠かくれ去さる。彼かの酒屋さかやの庫くらと、
觀世物みせもの小こ屋やの間あひだまで、わが家いえより半町はんちやうばかり隔へたりし。
眞中まんなかに古井戸ふるゐど一ひとツありて、雜草ざっさうの生おひ茂しげりたる舊空もとあき
地ちなりしに、其その小屋こや出で來きたるは、もの心こころ覺あえし後のち
なり。

興行ある毎に打囃す鳴物の音頼母しく、野衾の恐れも薄らぐに、行きて見れば、木戸の賑ひさへあるを、内は如何におもしろからむ。母上いませし折は、わが見たしと云ふを許したまはず、野衾の居て恐しき處なるに、いかで斯の可愛きもの近寄らしむべきとて留め給ひぬ。

亡き人となりたまひて後は、わが寂しがるを慰めむとや、伯母上は快よく日毎に出だし給ふ。場内の光景は見馴れて明に覺えたり。

土間、引船、棧敷などいふべきを、鶉、出鶉、坪、追込など稱へたり。舞臺も、花道も芝居の如くに出來たり。人數一千は入るゝを得たらむ。

木戸には櫻の造花を廂にさして、枝々に、赤きと、白きと、數あまた小提灯に、「て。」「り。」「は。」と一つ染め抜きたるを、夥しく釣して懸け、夕暮には皆灯すなりけり。其下あたり、札をかゝげて、一人々々役者の名を筆太にこそ記したれ。小親といふあり、重子といふあり、小松といふあり、

秋子あきこといふあり、細字さいじもてしのぶのぶといふあり。小光こみつ、
小稻こいなと書かきつらねて、別にべつ傍かたはらに小六ころくと書かいたり。

印半纏被たる壮伎の、軒に梯子さして昇りながら、
 一つ宛提灯に灯ともすが、右の方より始めたれば、
 小親といふ名、ばつと墨色濃く、鮮かに最初の火に
 照されつ。蠟燭の煮え込まざれば、其他はみな臙氣
 なりき。

ありたけの提灯あかくなりたる後に、一昨日も、
 其前の日も、昨日も来つ。この夕は時やゝ早かりけ
 れば、少時われ木戸の前に歩行くともなくイみつゝ、
 幾度か小親の名を仰ぎ見たり。名を見るさへ他のも
 のとは違ひて、そゞろに興ある感起りぬ。かねて其
 牛若に扮せし姿、太くわが心にかなひたるなり。

見物は未だ来り集はず。木戸番の燈大通より吹き
 つくる風に揺れて、肌寒う覺ゆる折しも、三臺ばかり
 俵をならべて、東より颯と乘着けしが、一齊に轆
 をおろしつ、と見る時、女一人おり立ちたり。續い
 て一人片足を下せるを、後なる俵より出でたる女、
 つと来て肩を貸すに手を掛けてひらりと下りたり。

先なるは紫の包を持ちて手に捧げつ。左右に二人引添ひたる、真中に丈たかきは、あれ誰やらむ、と見遣りしわれを、左なる女木戸を入りざま、偶と目を注ぎて、

「おや、お師匠様。」

また一人、

「あの、此のお子ですよ。」と低聲に言ひたり。聞棄てながら一步を移せし舞の師匠は振り返りつ。冴かなる眼にキとわれを見しが、互に肩を擦合せて小走りに入るよとせしに、つか／＼と引返して、冷たき衣の袖もてわが頤を抱くや否や、アと叫ぶ頬をしたゝかに吸ひぬ。

良ありてわれ眼をニりたり。三人は早や木戸を入りて見えざりき。あまり不意なれば、茫然として立つたるに、ふと思ひ出でしは野衾の事なりき。俄に恐しくなりて踵を返す。通の角に、われを見て笑ひながらイみたるは、其頃わが家に抱へられたる染といふ女なり。

走り行きて胸に縫りぬ。

「恐かつたよ、染ちやん恐かつたよ。」

「さう、恐かつたの、貢さんは彼が恐いのかい。」

「見て居たの。」

「あゝ見て居たとも、私が禁厭をしてあげたから

何とも無かつたんですわ。危ないことね。」

「恐かつたよ。染ちやん、顔をね、包んで了つた

から呼吸が出なかつたの。さうして酷いの、彼の頬

ぺたを吸つたんだ。チュツて然う云つたよ、痛いよ、

染ちやん。」

染は眉を顰めて仔細らしく、

「どれ、一寸お見せ。」

と言ひつゝ、「て」「り」「は」の提灯のあかり

に向けて透し見るより、

「おや、おや、おや、おや、大變。まあ。」とけたゝ

ましく言ふに、わが胸轟きたり。おど／＼すれば眞

顔になりて、

「亂暴だ、酷いことをするわ、野衾が吸つたんだ

ね、貢さん、血が出てるわ。……おや。」

驚きて、

「あら、泣くんぢやありません。何ともないよ、直ぐ治るから往來で何のこツたね、あら、泣かないでさ。」

と小腰を屈めて、湯に行きし歸途なれば、手拭の濡れたるにて、其の血の痕と云ふもの拭ひたり。

「さあ、治りました。もう何ともないよ。」

と賺す、血の出たるが、斯う早く癒ゆべしとは、

われ信ぜず。

「嫌だ、嫌だ、痛いや、治りやしないや。」

「困るね。」

いふ折しもまた此處に來懸りしは、むかひなる彼の女房なりき。われは又彼方に縋りぬ。

「小母さん、恐かつたよ。あのね、野衾が血を吸つたの。恐かつたよ。」

「え、何うしたつて云ふの、大變だ、あの野衾がね。」

かたはら
傍より、

「姉さん眞個ですよ、あのね。」
「
と言ひつゝ、ひたと身を寄せ、染は耳朶に嘯きて、

「ね、眞個ほんたうでせう……ですからさ。」と
再笑またわらへり。

女房にようぼうは微笑ほくそみながら、

「不可いけないよ。貢みつぎさんは何でも眞個ほんたうにするから欺だまされるんだよ。此賑このにぎかなのに、何だなんつて又野衾またのぶすまなんかで出るものかね。嘘うそだよ、綺麗きれいな野衾のぶすまだから結構けつこうさ。」

「あら姉ねえさん。」

「お止よしよ。そんなこと謂いつて威おどすのは蟲むしの毒どくさ、私も懲こりたことが有あるんだからね、欺だましツこなし。
貢みつぎさん、何血なにちなもんかね、御覽ごらんよ。」

中指なかゆびのさきを口くちに含ふくみて、やがて見みせたる、血ちの色いろつきたり。

「紅べにさ。野衾のぶすまでも何なんでも可かいよね。貢みつぎさんを可か愛あいがるんだもの、恐こはくはないから行いつて御覽ごらん、折角せつかく、氣晴きばらしに行くものを、ねえ。此奴こいつが、」

「あれ。」

「あばよ。」とばかり別わかれたる、囃子はやしの音おとおもしろきに、恐おそしき念ねんも失うせて、忙せはしく又木戸またぎどに行ゆき

ぬ。

能^{のう}は始^{はじ}まりたり。早^{はや}くと思^{おも}ふに、木^き戸^と番^{ばん}の男^{をとこ}、鼻^{はな}
低^{ひく}う脣^{くちびる}厚^{あつ}きが、わが顔^{かほ}を見^みてニタ／＼と笑^{わら}ひ居^ゐたれ
ば、何^{なに}をか思^{おも}ふと、其^{その}心^{こころ}はかり兼^かねて猶^た豫^めひぬ。

「坊ちゃん、お入んなさい、始りましたよ。」
 わが猶豫ひたるを見て、木戸番は聲を懸けぬ。日
 毎に行きたれば顔を見識れるなりき。

「何うなすつたんだ。さあ、お入んなさい、え、
 何うしたんだね。もう始りましたぜ。何でさ、木戸
 銭なんか要りやしません。お入んなさい、無銭で可
 うごす。木戸銭は要りませんから、菓子でも買つて
 おあがんなさい。」

大胡坐搔きたるが笑ひながら言示せり。然らぬだ
 に、われを流眊にかけたるが氣に懸りて、其まゝ歸
 らむかと思へるなれば、堪へず腹立たしきに、伯母
 上がたまひし銀貨入りたる緑色の巾着、手に持た
 るまゝハタと擲ちたり。銀貨入を誰が惜む。投ぐる
 と齊しく駈け出しぬ。疾く歸りて胸なる不平を伯母
 上に語らばやと、見も返らざりし背後より、鞞音忙
 しく追迫りて、手を捉へて引留めしは年若き先の女
 なり。

「坊ちゃん、まあ、あなた、まあ何う遊ばしたんですよ。何處へ入らつしやるのさ。え、何かお氣に入らない事があつたんですか。お怒りなすつて、まあ、飛んだ御機嫌が悪いのねえ。堪忍して頂戴な。よう、入らつしやいよ。さあ、私と一所においでなさいませぬ。何です、そんな顔をなさるもんぢやありません。」

「嫌だ。」

「あれ、そんなこと有仰らないでさ。あのね、あのね、小親さんがお獅子を舞ひますツて、ね、可いでせう、さあ、入らつしやい。」
と手を取るに、さりと拒み得で伴はれし。木戸に懸る時、木戸番の爺われを見つゝ、北叟笑むやうなれば、面を背けて走り入りぬ。

人大方は來揃ひたり。棧敷の二ツ三ツ、土間少し空きたる、舞臺に近き棧敷の一間に、女はわれを導きぬ。

「坊ちゃん、ぢやあね、此處で御覧なさいまし。」

意外なる待遇かな、恚りし事われは有らず。平時
はたゞ人の前、背後、傍などにて、妨とならざる限
り、處定めず觀たりしなるを。大なる棧敷の眞中に
四邊をニして、小き體一個先、つ突立てり。

只ばかりありて、假花道に亂れ敷き、支へ懸けた
る、見物の男女が袖肱の込合うたる中をば、飛び、
飛び、小走に女の童一人、しのぶと言ふなり。緋鹿
子を合せて兩面着けて、黒き天鵝絨の縁取りたる綿
厚き座蒲團の、胸に當て、膝を蔽ふまでなるを、兩
袖に抱へて來つ。

見返る女に顔を見合せて、

「あのね、姉さんが。」と小聲に含めて渡す。

受取りて女は棧敷に直しぬ。

「さあ、お敷き遊ばせよ。」

われは又蒲團に乗りて、坐りもやらで立つたりき。
女は手もて足を押へて顔を見て打笑みたり。

「さあ、おゆつくり。」

われは据ゑられぬ。

「しのぶさん、お火鉢。」

「あい。」と云ひしが■して、土間より立つた
る半纏着の壮伎を麾一き、

「ちよつと、火鉢をね。」

「おい。」と此方向く。其土間なる客の中に、

國曆の交りしをわれ見たり。顔を見合せ、そ知らぬ
顔して、仙冠者は舞臺の方に眼を轉じぬ。牛若に扮
したるは小親にこそ。

四

髪かみのいと黒くろくて艶つやかなるを、元結もつゆひかけて背せに長ながく結むすびて懸かけつ。大口おほくちの腰こしに垂たれて、舞まふ時とき靡なびいて見みゆる、また無なき風情ふぜいなり。狩衣かりぎぬの袖そでもゆらめいたり。長ちやうはん範はんをば討うつて棄すて、血刀ちがたなき提ひげて吻ほつと呼吸いきつく状さまする、額ひたひには振ふり分わけたる後毛おくれげの先端さきすこ少し懸かれり。眉まゆり凜りしく眼めの鮮あざやなる、水みづの流ながるゝ如ごときを、まじろぎもせで、正面しやうめんに向むかひたる、天晴あつはれ快こころよき見み得えなるかな。

囃はやし子の音おと止とみ寂ひつそ然ぜんとなりぬ。肅しゆくせん然ぜんとして身みを返かへして、三さんの松まつを過すぎると見みえし、くるりと捲まいたる揚あげ幕まくに吸すはるゝ如ごとく舞まひ込こみたり。

「お茶ちやはよろし、お菓子くわしはよしかな、お茶ちやはよろし。」

と幕まく間あいを賣う歩ある行く、賣う子この數かずの多おほき中なかに、物もの語がたりの銀ぎん六ろくとて癡たはけたる親おやぢ仁まし交ありたり。茶ちやの運はこびもし、火ひ鉢ちも持もて來き、下足げそくの手て傳つたもする事ことあり。をり／＼、小こ幾いく、ししのぶ、小こ稻いなが演えんずる、狂きやうげん言げんの中なかに立たち交まじりて、ともすれば屹きつとなりて居ゐ直なほりて足あしを構かまへ、手て拍びやう子うしう打うち

ち、扇あぶぎを揚あげて、演劇しばぬの物語ものがたりの眞似まねするが最いと巧たくみなれば、皆みなをかしがりて、然さは渾名あだなして囃はやせるなり。

眞似まねの上手じやうずなるも道理ことわりよ、銀六ぎんろくは舊俳優もとやくしやなりき。

曾かつて大槻内藏おほつきくら之助のすけの演劇しばぬありし時とき、渠かれ淺尾あさをを勤つとめつ。三年みとせあまり前さきなりけむ、其頃そのころ母上はうへ居たまひたれば、われ伴ともなはれて見みに行ゆきぬ。

蛇責へびぜめこそ恐おそしかりけれ。大釜おほがま一個ひとつ先つづ舞臺ぶたいに据すゑたり。背後うしろに六角ろくかくの太ふと柱はしら立て、釜かまに入いれたる淺あさ尾の咽喉のんどを鎖くさりもて縛しましめて、眞白ましろなる衣きぬ着きせたり。顔かほの色いろは蒼あをざめて、亂みだれ髪がみ振りかゝれるなかに輝かきたる眼まなこの光ひかりの凄すままじさ、瞻みまもり得うべきにあらず。夥兵くみこ立たち懸かり、押取おつとり巻まく、上手かみてに床几しやうぎを据すゑて侍控さむらいひかへ居ゐて、何なにやらむいひ罵ののりしが、薪たきぎをば投入なげいれぬ。

どろ／＼と鳴物なりもの聞きこえて、四邊あたり暗くらくなりし、青白あをしろきものあり、一條ひとすぢ左ひだりの方ほうより閃ひらめきのぼりて、淺尾あさをの頬ほを掠かすめて頭上づじやうに鎌首かまくびを擡もたげたるは蛇へびなり。二呀あなやと見みる時とき、別べつなるがまた項うなじを絡まとひて左ひだりなるとからみ合あひ

ぬ。恐しき聲をあげて淺尾の呻きしが、輪になり、
棹になりて、同じほどの蛇幾條ともなく釜の中より
蜿り出でつ。細く白き手をニきて、其の一條を搔搦
み、アと云ひさま投げ棄てつ。交る／＼取つて投げ
しが、はずみて、矢の如くそれたる一條、土間に居
給ひたる母上の、袖もてわれを抱きて内向き給し目
の前にハタと落ちたるに、フと立ちて歸りたまひき。

此時其役勤し後、渠はまた再び場の上らざるよし。
蛇責の釜に入りしより心地悪くなりて、はじめは唯
引籠りしが、俳優厭になりぬとて罷めたるなり。やゝ
物狂はしくなりしよしなど、伯母上のうはさしたま
ふ。

何地行きけむ。久しく其名聞えざりしが、此一座
に交りて、再び市人の眼に留りつ。彼の時の俤は、
露ばかりも残り居らで、色も蒼からず、天窓兀けた
り。大鬢に笑ひ調子高にもものいひ、身軽く小屋の中
を馳せ廻りて獨快げなる、わが眼にも此をぢが、彼の
の恐しき事したりとは見えず。赤き顱卷向うさまに
しめて、裾を括げ、片肌脱ぎて、手にせる菓子箱

高く捧げたるが其の銀六よ。

「人氣だい、人氣だい。や、すてきな人氣ぢや。お菓子、おこし、小六さん、小親さん、小六さんの人氣おこし、おこしはよしか。お菓子はよしか。」

「いまの能の品評やする、ぐわう／＼と鳴る客の中を、勢ひよく賣ありきて、やがてわが居たる棧敷に來りて、

「はい、これを。」
と大きく言ひて、紙包にしたる菓子をわが手に渡しつ。

「樂屋から差上げます。や、も、皆大喜ひ、數ならぬ私まで、は／＼。何てツてこれ坊ちゃんやうなお小さいのが毎晩見て下さる。當與行大當、滅茶々に面白い。すてきに面白い。おもしろ狸のきぬた巻でも、あんころ餅でも、鹿子餅でも、何でもございぢや、はい、何でもござい、人氣おこし、お菓子はよしか。小六さん、小親さん、小六さんの人氣おこし、おこしはよしか。」と呼びかけて前の

棧敷を跨ぎ越ゆる。

こゝに居て見物したるは、西洋手品の一群なりし。顔あかく、眼つぶらにて、頤を髻に埋めたる男、銀六の衣の裾むずと取りて、

「何を！」と言ひさま、三ツ紋つきたる羽織の片袖まくし揚げつゝ、

「何だ、小六さん、小六さんの人氣おこしたあ何だ。」

「へい。」

「へいぢやあ無い、小六さんたあ何だ。客の前を何と心得てるんだ。黙め、乞食藝人の癖に様づけに呼ぶ奴があるもんか。汝あ何だい、馬鹿め！」

と言ふより早く拳をあげて、其胸のあたりを八夕と撲ちぬ。背後に蹠跟けて澁面せしが、忽ち笑顔になりて、

「許させられい、許させられい。」
と身を返して遁げ行きぬ。

此時、人聲静まりて、橋がりを摺足して、膏藥練ぞ出で來れる。其の顔は前にわれを引留めて、此

處ゝに伴ともなひたる彼かの女むすめに肖にたるに、弗ふと背後うしろを見れば、
別べつなるうつくしき女をんな、何時いつか來きて坐すわりたり。黒髪くろかみを
束つかねて肩かたに懸かけたるのみ、それかと見みれど、佛おもかげは舞ぶた
臺いなりし牛若うしわかの凜り々ゝしげなるには肖にで、いと優やさしき
が、涼すずしき目めもて、振ふりむ向むきたるわが顔かほをば見みし。打うち
微笑ほゝみしまゝ未いまだものいはざるにソと頬ほ摺すりす。われ
は舞臺ぶたいに見向みむきぬ。

背後うしろ見みらるゝ心地こゝちもしつ。

やゝありて吸競すひくらべたる膏藥かうやく練ねりの、西にしなる方かた吸寄すひよせ
られて、不狀ぶさまに轉こけかゝりたる状さまいと可笑をかしきに、わ
れ思おもはず笑わらひぬ。

「おもしろうござんすか。」

と肩かたに手てをかけて潜ひそめき問とひぬ。

「よく來きて下くださいますね。一寸ちよいと、あの、これを。」

渠かれは先さきにわが投なげ棄すてし銀貨ぎんくわ入いれを手てにしつゝ、

「私わたしこれ頂いたいときますよ。ね、頂戴ちやうたい。可ようござん
すか。」

「あゝ。」

また頷うなづけば輕かるく頂いたき、帶おびの間あひだに挟はさみしが、

「木戸のがね、お氣に入りませんだつたら叱ツて貰つてあげますから、腹を立てないで毎晩、毎晩、入らつしやいましな、ね。ちやんと此處を取つて、私わたしの此このお蒲團敷ふとんしいてあげますわ。而さうしてお前まへさんの好きなことを見て見せませう。何なにが可いいいの、狂言きやうげんがおもしろいの。」

「いゝえ。」

「ぢやあ、お能のうの方ほうなの。」

「牛若うしわかが可いいいんだ、刀持かたなもつて立派りっぱで可いいいんだ。」

「さう。」と言いひかけて莞爾にっことせしが、見物けんぶつは皆舞臺みなぶたいを向むいたり。人知ひとしれずこそ、また一ツひと、爰こゝにも野衾居のぶすまゐたりしよ。

狂言

一

見物みな立ちたればわれも立ちぬ。小親が與へし
緋鹿子の蒲團の上に、廣き棧敷の中に、小さき體一
ツ再こそ此時突立ちたれ。切いかにせむ。前なるも、
後なるも、左も右も、人波打ちつゝどよ／＼と動搖
み出づる、土間棧敷に五三人、此處彼處に出後れし
が、頭巾被るあり、毛布纏ふあり、下駄の包提げた
るあり、仕切の板飛び飛びに越えて行く。木戸の方
は一團になりて、數百の人聲推合へり。われは唯茫
然として為む術を知らざりき。

「おい、歸らないか。」

と聲を掛け、仕切の板に手を支きて、われを呼び
たるは國曆なり。釘三ツばかり見ゆるまで、胸を廣
く搔廣げて、袖をも肱まで捲し上げたる、燃立つ如
き紅の襯衣着たり。尻さがりに結べる帯、其色此時
は紫にて、

「何うした、一所に歸らうな。」

「後から。」と低く答へぬ。

國麿は不満の色して、

「だつて皆歸るぢやあないか。一人ぼつちで何しに殘るんだ。」

「だつて、まだ、何だもの。」

と尚ほ猶豫ひぬ。女來て歸れと言はず、座蒲團このまゝにして、いかで、われ行かるべき。

國麿はものあり顔に、

「可いぢやあないか、一所に歸つたつて可いぢやあないか。」

「だつて何だから……何うしたんだなあ。」

只管樂屋の方打見遣る。國麿は冷かなる笑を含み、

「用があるんか。誰か待つてるか、おい。」

「誰も待つてやしないんだ。」

「嘘を吐け。いまに誰か來るんだらう。云つたつて可いぢやないか。」

「誰も來るんぢやあないや。然うだけれど……

・・・困るなあ。」

「何を困るんだ。え、何うしたんだ。」

「何うもしないさ。」

「ぢやあ困る事はないぢやあないか。な、一所に
歸らうと云ふに。」

顔の色變りたれば恐しくなりぬ。兎も角も成らば
成れ、ともに歸らむか。鳥居前のあたりにて、如何
なる事せむも計られずと思ひて逡巡するに、國曆は
早や肩を揚げぬ。

「疾くしないかい、おい。」

「だつて何だから。」

「何が何だ、をかしいぢやあないか。」

「この座蒲團が……」

國曆はいま見付けし顔にて、

「や、すばらしい蒲團だなあ。すばらしいものだ
な、何うしたんだ。此蒲團は何うしたんだ。」

「敷いてくれたの。」

「誰が、と聞くんた、敷いてくれたのは分つてら
い。」

「お能のね、お能の女。」

「ふむ、あんな奴の敷いたものに乗つかる奴が有

るもんか。彼奴等、おい、皆乞食だぜ。踊つてな、
謡唄つてな、人に銭よ貰つてる乞食なんだ。内の
父様なんかな、能も演るぜ。む、謡も唄はあ。而し
て上手なんだ。而して然ういつてるんだ。眞個のな、
お能といふのは男がするもんだ。男の能は眞個の能
だけれど、女のは乞食だ。そんなものが敷いて寄越
した蒲團に乗るとな、汚れるぜ。身が汚れらあ。ひ
ちりけつばいだ、退け！」

踏みこたへて、

「何をする。」

「何でえ、おりや士族だぜ。退け！」

國曆は擬勢を示して、

「汝平民ぢやあないか、平民の癖に、何だ。」

「平民だつて可いや。」

「ふむ、豪勢なことを言はあ。平民も平民、汝の内や藝妓屋ぢやあないか。藝妓も乞食も同一だい。

だから乞食の蒲團になんか坐るんだ。」

われは恥かしからざりき。娼家の兒よと言はるゝ毎に、不斷は面を背けたれど、恚ういはれし此時のみ、われは恥しと思はざりき。見よ、見よ、一たび舞臺に立たむか。小親が輕き身の働、躍れば地に棲を着けず、舞の袖の翻るは、宙に羽衣懸ると見ゆ。長刀かつぎてゆらりと出づれば、手に抗つ敵の有りとも見えず。足拍子踏んで大手を擴げ、颯と退いて、衝と進む、疾きこと電の如き時あり、見物は喝采しき。輕きこと鷺毛の如き時あり、見物は喝采しき。重きこと山の如き時あり、見物は襟を正しき。うつくしきこと神の如き時あり、見物は恍惚たりき。かくても見てなほ乞食と罵る、然は乞食の蒲團に坐し

て、何等^{なんら}疚^{やま}しきことあらむ。われは傲^{がう}然^{ぜん}として答^{こた}へたり。

「可^いいよ乞^こ食^{じき}、乞^こ食^{じき}だから乞^こ食^{じき}の蒲^ふ團^{とん}に坐^{すわ}るんだ。」

「何^{なん}でえ。」

國^{くに}曆^{まろ}は眼^{まなこ}を圓^{つぶら}にしつ。

「何^{なん}でえ、乞^こ食^{じき}だな、汝^な乞^こ食^{じき}だな、む、乞^こ食^{じき}がそんな、そんな縮^{ちり}緬^{めん}の蒲^ふ團^{とん}に坐^{すわ}るもんか。」

「可^いいよ、可^いいよ、私^{あた}い、私^{あた}いはね、こんなうつくしい蒲^ふ團^{とん}に坐^{すわ}る乞^こ食^{じき}なの。國^{くに}ちやん、お菰^こ敷^しいてるんぢやないや。うつくしい蒲^ふ團^{とん}に坐^{すわ}る乞^こ食^{じき}だからね。」

國^{くに}曆^{まろ}は赤^{あか}くなりて、

「何^{なん}よう言^いつてんだい。おい貢^{みつ}、汝^なそんなこと言^いつて可^いいのかな、歸^か途^{へり}があるぜ。」

威^{おど}されてわれは其^{その}顔^{かほ}を見^みたり。舞^ぶ臺^{たい}は暗^{くら}くなりぬ。人^{ひと}大^{おほ}方は立^たち出^いぬ。寒^{さむ}き風^{かぜ}場^{ちやう}に満^みちて、釣^{つり}洋^{らん}燈^{ぶみ}三^{さん}ツ四^よ薄^{うす}暗^{くら}き明^あ映^{かり}すに心^{こゝろ}細^{ほそ}くこそなりけれ。

「歸^か途^{へり}があるつて。歸^か途^{へり}が何^どうしたの、國^{くに}ちや

ん。
」

國曆は嘲笑へり。

「知つてるだらう。鳥居前の俺が關を知つてるだらう。」

手下四五人、稲葉太郎荒象園の鬼門彼處に有りて威を恣にす。われは黙して俯向きぬ。國曆はじりりと寄りて、

「皆知つてるぜ、おい、皆見て居たぜ。汝婦人とばかり仲好くして、先刻もおれを見て知らない顔して談話してたぢやあないか。然うするが可いや、うむ、たと然うするさ。」

「國ちゃん、堪忍おし。」

「へ、あやまるかい。うむ、あやまるなら可いや。ぢやあ可いから、な、其座蒲團に一寸己をのつけてくれないか、其處を退いて。さあ、」

國曆は又と立ちつゝ、褌取りからげて、足を、小親がわれに座を設けし緋鹿子に乗せんとす。止むなく、少しく身を退きしが、唯見れば足袋を穿きもせ

で、そこら跣足にてあるく男の、足の裏太く汚れて見ゆ。こゝに乗せなばあかつけなむ、土足に此の優しきもの踏ますべきや。

「いけないよ。」

「何だ………」

覺悟したれば身を交して、案の如く踵をあげたる、彼が足蹴をば外してやりたり。蒲團持ちながら座を立ちたれば、拳の楯に差翳して。

「あら。」

國麿の手は弛みぬ。われは摺抜けて傍に寄りぬ。

「否です、否です、あなたは否です。」

緋鹿子の片隅に手を添へて、小親われを庇うて立

ちぬ。國麿は目を怒らしたり。其帯は紫なり、其襯

衣は紅なり。緋鹿子の座蒲團は、われと小親片手づゝ

掛けて、右左に立護りぬ。小親此時は樂屋着の裾長

く緋縮緬の下着踏みだきて、胸高に水色の扱帯ま

とひたり。髪をばいま引束ねつ。優しき目の裡凜と

して、

「もし、旦那様、あの、乞食の蒲團は、否です、

私が貴方にや敷かせないの。私の蒲團です。渡すこ

とはなりません。」

と聲最とすゞしくいひ放てり。

「よく敷かせないで下さいました。お前さん、何處も何ともないかい。酷いよ、亂暴ツちやあない。

よくねえ、よく庇つて下さつたのね。樂屋で皆がせりあつて、やう／＼私が、あの私のを上げたんです

もの。他人に敷かれて堪るものかね、お歸りよ、お歸り遊ばせよ。あなた！」

「何でえ、乞食の癖に、失敬な、失敬ぢやあないか。お客に向ツて歸れたあ何だい。」

「おからだの汚になります。ねえ。」

とわが顔に頬をあてゝ、瞳は流るゝ如く國曆を流眊に掛く。國曆は眉を動かし、

「馬鹿、年増の癖に、ふむ、赤ン坊に惚れやがつたい。」

「え、」
と顔を赧らめしが、

「何ですねえ、存じません。何の、鼻屑になすつて下さるお客様を大事に為たつて、何が、何が、をかしうござんすえ。」

「をかしいや、そんな小ツぼけなおお客様があるもんか。」

「あら、私ばかりぢやありません。姉さんだつて、然ういひました。そりや御鼻屑になすつて下さるお客も多いけれど、何の氣なしに唯おもしろがつて見て下さるのは此のお兒ばかり。あなた御存じないんでせう。當座ではじめてから毎晩、毎晩來て下

すつて、あの可愛らしい顔をして傍見もしないで見
て居て下さるぢやありませんか。此お年紀で、お一
人で、行儀よく終番まで御覧なすつて、欠伸一ツ遊
ばさない。

手品ぢやアありません、獨樂廻しぢや有りません。
球乗でも、猿芝居でも、山雀の藝でもないの。狂言
なの、お能なの、謡をうたふの、母様さんに連れら
れて、お乳をあがつて在らつしやる方よりほか、こ
んな罪のない小兒衆のお客様がもう一人ござんすか。

目につきました、目立ちました。他のお客様には
何うであらうと、此の坊ちゃんだけにや飽かしたく
ない。退屈をさしたくない、三十日なり、四十日な
り、打ち通すあひだ来ていたゞきたい、おもしろう
見せてあげたいと、然う思つたが何うしました。

眞個に藝人冥利、恚ういふ御鼻肩を大事にするは
當前でござんせんか。しのぶも、小稻も、小幾も、
重子も、みんな弟子分だから控へさして、姉さんの

をと思つたけれど、私の方が少いからお相手に似合ふといふので、私の座蒲團をあげたんですわ。何も年増だの、何のつて、貴方に、そ、そんなことを言はれる覚えはない！」

と太く氣色ばみ言ひ開きし。聲高なりしを怪みけむ。小稻、小幾、重子など、狂言囃子の女ども、樂屋口より出で來りて、はらりと舞臺に立ちならべる、大方あかり消したれば、手に手に白と赤との小提灯、
「て」「り」「は」と書けるを提げたり。

四

舞臺なりし装束を脱替へたるあり、未だなるあり、
烏帽子直垂着けたるもの、太郎冠者あり、大名あり、
長上下を着たるもの、髪結ひたるあり、垂れたるあ
り、十八九を頭にて七歳ばかりのしおぶまで、七八
人ぞ立ならべる。

「何うしたの、何うしたの。」

と赤き小提灯さしかざし、浮足してソト近寄りた
る。國麿の傍に、しのぶの何心なく來懸りしが、

「あれ。」

恐しき顔して睨めつけながら、鼻の前にフ、と笑
ひて、

「何か言つてらい、おたふくめ。」

と言棄てに身を返すとて、國麿は太き聲して、

「貢！」

「牛若だねえ。」とて小親、兩袖を以てわが背
蔽ひぬ。

「覚えて居れ、鳥居前は安宅の關だ。」と肩を
揺りて嘲笑へる、渠は少しく背屈みながら、紅の襦

衣の袖二ツ、むらさきの帯に突挿し つゝ、腰を振りてのさりと去りぬ。

「濟まなかつたね、みつぎさん、お前さん、貢さんて言ふの？」

「あゝ。」

「樂屋に少し取込みが有つたものだから、一人にして置いて飛んだめに逢はせたこと。氣が着いて、悪いことをしたと思つて、急いで來て見ると如彼なもの。よくねえ、そして、あの方はお友達？」

「友達になれツていふのよ。」

「おや、さう。しない方が可いよ。可厭な人つちやあ無い。それでもよく蒲團を敷かせないで下すつた。それは私や嬉しいけれど、もしお前さん疵でも着けられちや大變だのに、何うして、何故敷かせて遣らなかつたの。」

「だツて、あんな汚い足をつけられると、この蒲團が可哀さうだもの。きれいだね、きれいな座蒲團、可愛んだねえ。」

眞中を絞りて、胸に抱き、斜に頬を押當つるを、

小親見て、慌しく、

「あら、そんな事をなすツちや、お前さんの顔に。

まあ、勿體ない。」

とて白き掌もて拭ふ眞似せり。

「あの眞個に、毎晩入らつしやいよ。私もついあんな事を云つたんだから、彼の人につけても、お前さんが毎晩来てくれなくツらや極が悪いわ。後生ですよ。其の代り、この蒲團は、誰の手も觸らせないで恚うやつて、」

二隅を折りて襟をば搔あげ、胸のあたりいと白きに其紅を推入れながら、

「かうやつて、お守にしておくの。さうしちや暖めて置いて、入らつしやる時敷かせますからね、屹度よ。」

「あゝ。」

「眞個かい。」

「きつと！」

「嬉しいねえ。」と莞爾として、

「ぢやあね、晩くなりましたから今夜はお歸んな

さいな。母様がお案じだらうから。」

母はあらず。

「母様ぢやあないの。伯母さんなの。」

「おや、母様ないの。」

「亡くなつたの、また入らつしやるんだツて、皆さう云ふけれど、嘘なの。もうお歸りぢやない、亡くなつてしまつたんだ。」

「まあ。」と言ひかけて再瞻りしが、頷く状にて、

「ぢやあ其伯母さんがお案じだらうから、私が送つて行つてあげませう、ね。鳥居前ツて言ふのは何處？ 待伏をしてると不可いから。」

「直、其處だよ。」

「わけ無しだね。ちよつと衣物を着替へて來るか
ら待つて入らつしやいよ。小稲さん、遊ばしてあげ
ておくれ。」

「はい。」

ばら／＼と女ども五六人、二人を中に取巻きたり。
小稲と云ふが先づ笑ひて、

「若お師匠様、おめでたう存じます、おは／＼／
／。」

小親は素知らぬ顔したり。重子といふが寄添ひ
つゝ、

「ちよつと、何がおめでたいのさ。」

「おや、迂潤だねえ。知らないのかい。」

「はあ、何ですか。」

「何ですか存じませんが、小稲さんのいひますと
ほり、若お師匠様、おめでたうございます。」

傍より小幾がいふ。小松がまた引取りて、

「私もお祝ひ申しますわ。」

「それでは私も。あの、若お師匠様おめでたう存じます。」

小親は取巻れてうる／＼しながら、

「お前達は何をいふのだ。」

「何でも、おめでたいに違ひませんもの。」

「姉さん、何なの、何うしたの。」

と差出で、しのぶの問ひければ、小稲は靜に頷きて、

「お前は嬰兒だから解るまいね、知らない道理だから言つて聞かせよう、あのね、若お師匠様にね、

御亭主が出来たの。」

大勢、

「おや／＼／＼／＼。」

小親は顔を赧らめたり。

「知らないよ！」

小稲また立懸り、

「お秘し遊ばしても不可ません。而して若お師匠様、あなた最うお兒様が出来ましたではございませんか。」

「へい。」

「何を言ふのだね。」

「争はれませんものね。最うおなかゞ大きくおな
り遊ばしたよ。」

「む、此かえ。」と俯向きて、胸を見て、小親
は艶麗に微笑を含みぬ。一同目を着け、

「ほんにね。おや／＼！」

「だから、お茅出たからうではないの。」

「そして旦那様は何方でございます。」

「馬鹿だねえ、嘘だよ。」

「それでは何でございます、何うしてそんなにお
成り遊ばしたの。」

「何でもないのさ、知らないツて言ふのに。」

「いえ、御存じないでは濟みません。あなた私た
ちにお隠し遊ばしては水臭いぢやアありませんか。

是非何卒、何誰でございますか聞かして下さいまし
な。」

「若お師匠様、何卒私にも。」

「私にも。」

「うるさいね、いま一寸出懸けるんだから。」

「いえ、お身持で夜あるきを遊ばすのはお毒でこ
ざいます。それはお出し申されません。ねえ？」

「お身體に障りましては大變ですとも。何うして、何うして、お出し申すことではございませんよ。」

「うるさいよ、詰らない。」

「ぢやあお見せ遊ばせ、一寸其お腹ン處を、お見せ遊ばせ。」

「然うはゆかない、ほゝゝゝゝ。」

「撥りますよ！」

「然うはゆかない、あれ！」

と言ふより身震せしが、俯伏にゆらめく頭插、眞白き項、手と手の間を抜けつ、潜りつ、前髪ばらりとこぼれたるが仰げざまに倒れかゝれる、裳蹴返し踵を空に、下着の紅宙を飛びて、技利のことなれば、二間ばかり隔りたる舞臺にひらりと飛び上りつ。すらりと立つて向直り、胸少し搔あけて、緋鹿子の座蒲團の片端見せて指さしたり。

「稻ちゃん、此のことかい。」

「は。」と小稻は前に出でゝ、

「もうお幾月ぐらゐ？」

「さやうさ、九ツ十」とばかり、小親わ

れを見てまた微笑みぬ。

「さあ、こんど」一は坊ちゃんの番だよ。」

とて、小稲つゝと差寄りつゝ、

「坊ちゃん、お相手をいたしませうね。何を^{なに}して

遊び^{あそ}ませう。」

われは黙^{もく}して言^いはざりき。

「おや、私^{わたし}ではお氣に入らないさうだよ。重子^{しげこ}さ

ん、一寸お前^{まへ}伺^{うか}つて御覽^{ごらん}。」

「はい。」と進^{すす}み、「さあお相^{あひて}手。」と言^いふ。

「そんな藪^{やぶ}から棒^{ぼう}な挨拶^{あいさつ}がありますか！」

「おや！ おや！」と退^のいたるあと、小松^{こまつ}なるべ

し立替^{たちかは}れり。

「私^{わたし}では不可^{いけ}ませんか。」

「遊^{あそ}ばなくツてもいゝ。」

「まあ、素氣^{そつげ}なくツていらつしやる。」

小稲^{こいな}は笑^{わら}ひぬ。

「坊^{ぼっ}ちゃん、私^{わたし}にね、そつと内證^{ないしやう}でおつしやいな、

小親^{こちか}さんが、あの、坊^{ぼっ}ちゃんに何^{なに}かいつたでせう。」

「言^いはない。」

「うまくおつしやるのよ、可愛い坊ちゃんだツて、然ういつたでせう。」

「あゝ、言つた。」

「皆どつと笑ひたり。」

「驚きましたね、そして何でせう。あの、外の女と遊ぶ事はなりません、然う言やあしませんか。」

「然ることは聞かざりき。」

「そんなこと、言やあしないや。」

「あら、お隠し遊ばすと懽りますよ。」

「眞個、そんなこと聞きやしない。」

「それぢや堪忍してあげますから、今度は秘さないで仰有いよ。あのね、坊ちゃんは毎晩入らつしや

います、何が第一お氣に入つたの。」

「牛若が可いんだ。そしてお獅子も可いんだ。」

「ぢやあ小親さんが可いんですね。うつくしいからお氣に入つたんでせう。え、坊ちゃん。」

「立派で可いんだ。刀さげて、立派で可いんだ。」

「うそをおつしやい。綺麗だから可いんですわ。」

「いゝえ。」

「だつて、それではお能の装束しないで居る時はお氣にや入りませんか。今なんざ、あんな、しだら

ない装なりをして居ゐたぢやありませんか。」

われは考かんがへぬ。いかに答こたへて可よからむ。言いひ損そこなはゞ
笑わらはるべし。

「やつぱり可いいでせう。ね、それ御ご覧らんなさい。

美女きれいだからだよ。坊ぼつちゃんは小親こちかさんに惚ほれたの

ね。」

皆みな哄どつと笑わらふ。

「惚ほれやしない、惚ほれるもんか。」

「だつてお氣きに入いつたんでせう。佳いい人ひとだと思おもふ

んでせう。」

「あゝ。」

また聲こゑをあげて笑わらひしが、

「ぢやあ惚ほれたもをんなじだわ。」

「あら／＼、惚ほれたの、をかしいなあ。」

しのぶ手てを拍たきて遁にげながら言いふ。

哄どつと笑わらひて、左さ右いうより立たち懸かり、小稻こいなと重子しげこと手て

手てを組くみつゝ、下したより掬すくひて、足あしをからみて、われ

をば宙ちゆうに昇かつて乗のせつ。手ての空あいたるが後あと前さきに、

「て」「り」「は」の提灯ちやうちんふりかざし、假花道かりはなみちより

練出して、

(お手々の手車に誰様乗せた。)

(若いお師匠様の婿様乗せた。)

(二階棧敷の坊ちゃん乗せた。)

と口々に唄ひつれて舞臺を横ぎり、花道にさしかゝ

る。ものうければ下せとて、上にてあせるを許さば

こそ。小稲はわが顔を仰向き見て、

「坊ちゃんも何ぞお唄ひなさい。然うすると下し

てあげます。」

止むなく聲あげてうたひたり。

(一夜源の助がまけたに借りた、)

(負けたかりたはいくらほど借りた。)

(金子が三兩に小袖が七ツ、)

(七ツ七ツは十四ぢやあないか。 . . .)

しのぶは聲を合せてうたひぬ。

(下谷一番伊達者でござる。)

(五兩^{ごりやう}で帯^{おび}を買^かうて三兩^{さんりやう}で紵^くけて、)
(紵^く目々^め々に七房^{ななふさ}さげて。)

木戸^{きど}の外^{そと}には小親^{こちか}八ヤわれを待^{まち}ちて、月^{つき}を仰^{あふ}ぎて
イ^たみ^すたり。

夜の辻

—

頭巾づきんを着きて肩掛しやう引絡ひきまへる小親こちかが立姿たちすがた、月下げつかに斜ななり。
横よこむ向むきて目迎めむかへたれば衝つと寄りぬ。立竝たちならべば手てを取とりて、

「寒いこと、此處こゝへ。」

とて、左ひだりの袖下そでした搔開かいひらきて、右みぎ手を添そへて引入ひきいれし、
肩掛しやうのひだしとノノと重おもたくわが肩かたに懸かりたり。冷つめたき帯おびよ。其肩そのかたのあたりに熱ねつしたる頬ほを撫なで、時とき計いの鎖輝くさりかぎきぬ。

「向うむかなの、貢みつぎさんの家うちは。」

衣きぬずれの音立おとたて、手てをあけてぞ指ゆびさし問とひたる。
霞かすみヶ峰みねの半腹はんぶくに薄うすき煙けむりめぐりたり。頂いたゞきの松まつ一本ひともと、濃こく黒くろき影かげあざやかに、左ひだりに傾かたむきて枝垂えだたれれたり。頂いたゞきの
兀はげたるあたり、土つちの色いろも白しろく見みゆ。雑木ざふきある處ところだ
んだらに隈くまをなして、山やまの腰遠こしとほく瓦屋根かはらやねの上うへにて隠かく
れ、二町越ふたまちこえて、流ながれの音おともす。

東より西の此方に、二ならび兩側の家軒暗く、小
さき月に霜凍てゝ、冷たき銀敷き詰めたらむ、踏心
地堅く、細く長き此の小路の中を横截りて、廂より
軒にわたりたる、わが青楓眼前にあり。

「彼處、あの樹のある内。」

「近いのね。」

と歩を移す、駒下駄の音先づ高く堅き音して、石
に響きて辻に鳴りぬ。

「大分晩くなつたね、伯母さんが嘸お案じだらう
に、悪いことをしたよ。貢さん、直送つてあげれば
可かつたのに、早いと人だからがして煩いので、つ
い。」

「否、案じてやしないよ。遊びに出て居ると伯母
さんは喜ぶよ。」

「何うして？ まあ。」

小親は身を屈めてわが耳を覗いて聞く。

「皆で、餘所の叔父さんと、兄さんと、染ちゃん
と、皆でね、お酒を飲んで而して遊んで居るの、賑
かだよ。私ばかり寂しいの、一所に遊びたいんだけ

れど、お寝、お寝つて言ふもの。」

小親はまた歩行きかけつゝ、

「それはね、貢さんが睡がる故でせう。」

「然うぢやあなくツて、私床ン中に入つてからね、母様が居なくツて寂しくツて寝られないんだ。伯母さんも、染ちゃんも、餘所の人も皆おもしろさうだよ。賑かなの。私一人寂しいんだ。」

「さうかい。」

「鼠が出て騒ぐよ。ぐわた／＼ツて、・・・」

恐いよ。」

「まあ。」

「恐かつたよ、それでね、私、貰つといたお菓子だの、お煎餅だの、ソツと袂ン中へしまツとくの、そしてね、紙の上へ乗せて枕頭へ置いとくの。そして鼠にね、お前、私を苛めるんぢやありません。お菓子を遣るからね、おとなしくして食べるんだツて、然う云つたよ。」

「利口だねえ。」

「然うするとなね、床ン中で聞いて、ソツと考へて居るとね、コトコトツてつちや喰べるよ。而して些

とも恐こはくなくなつたの。毎まい晩ばんやるんだ。いつでも來きちやあ食たべて行くよ。もう恐こはくはなくツて、可愛かはいらしいよ。寝ねるとね、鼠ねずみが來こないか來こないかと思おもつて目めを塞ふさいぢやあ待まつてるの。然さうすると寝ねてしまふの。目めを覺さますとねえ、皆みんな食たべて行いつてあつたよ。」

われは小親こちかの名呼なよばむとせしが猶豫ためらひぬ。何なんとか言いふべき。

「ねえ。」

「あいよ。」

「ねえ、鼠ねずみは可愛かはいいんだねえ。」

「ぢやあ貢みつぎさん家に猫ねこは居あないのかい。」

「居あるよ、三毛猫みけねこなの。此間このあひだね、四ツ兒よっこを産うんだ

よ、伯母おばさんが可愛かはいがるよ。」

「貢みつぎさんも可愛かはいがつておくれかい。」

われは肩掛しやうかの中に口籠くちごもりぬ。袖面そでおもてを蔽おほひたれば、

搔かき分わけて顔かほをば出いしつ。冷つめたき夜よるなりき。

小親こちかの下駄げたの音おと不圖ふと止やみて、取り合あひたる掌てに力ちから籠こもりしが、後うしろざまに退すまりたり。鳥居とりゐの影かげの横よこたふあたり、人ひと一人ひとり立つたるが、動うごき出いづるを、それ、と胸むねと轟とろく。果はたせるかな。蟲いなしの飛とぶよ、と光ひかりを放はなちて、小路ちぢの月つきに閃めめきたる槍やりの穂ほ先さき霜しもを浴あびて、柄えな長ながく一いち文字もんじに横よこたへつゝ、

「来こい！」 とばかりに呼よはりたる、國曆くにまろは、危あやふきもの手てにしたり。

「何なんだ、其それは何なんだい。」

われは此方こなたに居ゐて聲こゑかけぬ。國曆くにまろは路みちの中央まんなかに突つ立たちながら、

「寶藏院ほうざういんの管槍くだやりよ！」

小親こちかは前まへに出いでむとせず、固かたく立たちて瞻みまもりぬ。

「出でて来こい、出でて来こい！ 出でて来こい！」

と最いと誇顔ほこりがほにほざいたり。小親こちかわが手てを放はなたむとせず。

「出でて来こい。男をとこなら出でて来こい。意氣地いぐぢなし、女郎めらうの懷ぶらに挟はつてら。」

われは振放たんとす。小親は聲低く力を籠めて、
「いけない、危いから。」

「可いんだ。」

「可いぢやありません。お止し、危ないわね。」

如彼がむしやらの向うさき見ずは、何んな事を為す
うも知れない。怪我をさしちやあ、大變だか

ら……あれさ！」

「構ふもんか、厭だ！ 厭だ。」

「厭だつて、危いもの。返りませう。あとへ返り
ませう。大人でないから恐いよ。」

國麿は快げに、

「様あ見ろ、女の懷を出られやしまい、牛若も何
もあるもんか。」

「厭だ、厭だ、女と一所にや厭だ。放して、放し
てい。」

「堪忍おし、堪忍おし、堪忍して頂戴、私が悪い
んだから堪忍おしよ。」

「犇と抱きて引留むる。國麿は背ゆるぎさして、
勝つたぞ、ふむ、己が勝つた。貢、汝が負けた。」

可いか、能のうのな、能のうの女をんなは己おれがのだぜ。」

言葉いひすて、槍やりを繰くり込こみ、流しりめ眄めに掛かけながら行ゆかむとす。

「負まけない、負まけやしないや。」

國くにまろ曆ろは振ふりかへ返へり、

「それぢやあ来るか。」

「恐こはかあ無ないや。」

「む、来るなら来こい！ 女めらう郎らうの懐ふところから出でて来きて見みる。」

小こ親ちかあなやニ呀さげと叫さけびしを聞きき棄すてに、振ふり放はなちて、つか／＼とぞ立たち出いでたる。背うしろ後の女ひとは如い何かにすらむ、前まへには槍やりを扱しごいたり。

「さあ、来こい。」

と目めの前まへに穂ほ尖さき危あぶなし。顔かほを背そむけ、身みを反そらし、袖そでを翳かざして、

「牛うしわか若わかだ、牛うしわか若わかだ、牛うしわか若わかだ。」

「安あた宅かの關せきだい。」

「何なにするもんか、突つかれるもんか。」

「突つくよ、突つくよ。藝げい妓しゃ屋やの乞こ食じきなんか突つついて

勿ね飛ばさあ。」

為兼ねまじき氣勢なれば、氣はあせれども逡巡ひぬ。小親背後に見てあらむと、われは心に恥ぢたりき。

「様あ見ろ、汝先刻は威張つたけれど、ふ、大きな口よウたゝくなあ、蒲團に坐つてる時ばかりだ。うつくしい蒲團に坐つてる乞食やそんなものか。詰らないもんだなあ。乞食、弱蟲、背後に立つてるなあ何奴だ。矢張乞食か、えゝ、意氣地が無いな。」

するりと槍を取直し、肩に立懸け杖つきつゝ、前に屈みて、突出せる胸の紅の襦衣花やかに、右手に押廣げて拍いたり。

「口惜くばドンと来い！」

驚破、此時、われは目を瞑りて、まつしぐらに其
 手元に衝入りしが、膝を敷いて茫然たりき。

「あれ！」

「危い。」

と國曆の叫びつゝ、しばし呆れたる状してイみし
 が、見上ぐるわれと面を合し、ぢつと互に打まもり
 ぬ。

「恐しい奴だなあ。」

國曆は太い呼吸を吻とつきて、

「汝の方が亂暴だ。餘程亂暴だ、無鐵砲極まら

あ、あゝ。」

とまた息吐きつゝ、落膽したる顔色して、ゆるや
 かに踞ひたり。

「え、おい、胸でも突かれたら、おい貢、何うす
 るつもりだ。氣が短いや、うつたぜ。亂暴な。何處
 だ、何處だ、むゝ。」

「痛かあない、痛かあない。」

「む、泣くな、泣いちゃあ不可んぜ。あゝ、何、
 袂ッ草を着けときやあわけなしだ。」

と槍を落して、八口より袂の底を探らむとす。暖
かき袖口もて頬の掠疵押へたりし小親聲を掛けて、
「厭ですよ、そんな袂ツ草なんて汚いもの、不可
ません。酷いことね。もう、灸のあとさへない兒に、
酷いつちやあ無い。御覧なさい、こんなに成つたぢ
やありませんか。あら、あら、血が出て、何うしよ
う。」

國麿は仰ぎ見て、

「疵は深いかな。酷いかな。」

其太き眉を顰めたり。小親は月の影に透しながら、

「そんなぢやあ無いんだけれど、掠つたんでせう

けれど。」

「ぢやあ、何、袂ツ草で治ツちまあ。」

再び其袂の中探らむとす。

「厭、そんな、そんなものを、此顔に附着けて可

いもんですか。」

國麿は苦笑して、

「それぢやあ其方で可いやうにするさ。あゝ、驚
いた。」

ちから
力なげに槍を拾うて立ちしが、

「貢、もう己あ邪魔あしない。堪忍してやらあ、

案じるな。」

と、くるりと此方に背向けつゝ、行懸けしが立ち

返りて、圓なる目に懸念の色あり。又むかう向に身

を返して、

「袂草が血留に成るんだ。袂草が血留に成ら

あ。」

聞かすともなく呟きつゝ、鳥居の傍なる人の家の、

雪垣に隠れしが、二の鳥居の有るあたり、廣き境内

の月の中に、其の姿露れて、長く、長く影を引き、

槍重たげに荷ひたる、平たき肩を窄めながら向う屈

みに背を圓くし、最寒げなる状見えつゝ、黒き影法

師小さくなりて、突あたり遙なる、門高き構の内に

薄霧籠めて見えなくなりぬ。われはうか／＼と見送り

しが、此時其人憎からざりき。

「一寸、痛むかい。痛むだらうね、可哀相に。」

「何ともない。痛かあない。」

「大した事もないけれど、私やもうハツと思つた。」

彼の兒をつかまへて喧嘩もならず、お前さん、が又
肯かないんだもの、はら／＼と思つてる内、もう、
何うしたら可いだらう。折角送つて來ながら申譯が
ないね。」

「可いよ、痛かあ無いもの。」

「だつて疵がつかまりました。かすり疵でも、あら、

こんなに血が出るもの。」

と押拭ひ、又おしぬぐふ。

「もう可い。」

「可かありませんよ、このまんまにして、歸し

ちやあ、私が貢さんのお内へ濟まないもの。」

伯母上何をか日はむ。

四

「ぢやあ恂うしようね、一緒に私の家へ来て今夜お泊りでないか。さうして、翌日になつたら一緒に言譯をませうよ。私でも、其でなきや誰か若い衆でも着けてあげてね、そして伯母さんにお詫をしたら可いでせう。」

「可いよ、そんなにしなくツても、一人で歸るよ。」

「だつて……困ること。」

「何とも無いぢやあないか。」

前になりて駈出せば、後より忙しく追継りて、

「そんなら、まあ可いとして門まで送りませう。」

だがねえ、可かつたら然うおしな。お嫌!

「嫌ぢやあないけれど、だつて、あの、待つてるから。」

「さう、伯母さんが嘸ぞ、何んなにかね。」

「いゝえ、伯母さんぢやあない、姉さんのの。」

「おや、貢さん、姉さんがいらつしやるのかい。」

「宅にぢやあ無いの。むかひのね、廣岡の姉さん」

なの。」

「廣岡ツて？」

「繼母の内なの。繼母が居てね、姉さんが可哀相

だよ、」

「憚う言ひたる時、われは思はず小親の顔見られに
き。」

「あのウ、」

「何。」

「何て然ういほうなあ、何て言ふの。あの、お能の姉さん？」

「嫌ですね、お能の姉さんツて、をかしいね、嫌

だよ。」

「ぢやあ何ていふの。え、何ういふの。」

「頭巾の裡に笑を籠めて、」

「私はね、……親。」

「親ちゃん！」

「あい。おほ。」

「親ちゃん、繼母ぢやあないの。え、繼母は居な

いのかい。」

「憂慮しければぞ問ひたる。小親は事も無げに、」

「私には何にもないよ。唯ね、親方が有るの。」
「さう、ぢやあ可いや、繼母だと不可いよ。酷い
よ。廣岡の姉さんは泣いて居る……」

先より然まで心にも止めざるやうなりし小親は、
此時身に沁みて聞きたる状なり。

「それは氣の毒だね。皆さうだよ、繼母は情ない
もんだとね。貢さんなんざ、まだまあ、伯母さんだ
から結構だよ。何でも言ふことを肯いて可愛がられ
るやうになさいよ。おゝ、然ういやあ眞個に晩くな
つて叱られやしないかね。」

「もう來たんだ。ちよつと。」

手を放すより、二三間駈出して、われはまづ青楓
の扇の地紙開きたるやう、月を蔽ひて廣がりたる枝
の下にイみつ。仰げば白きもの仄見ゆる、前の日雨
ふりし前なりけむ、姉上の結びたまひし折鶴のなご
りなり。

打見るさへ最と懐しく、退りて二階なる窓の戸に
向ひて、

「姉さん、唯今歸りました。」

と高く呼びぬ。毎夜狂言見に行きたる歸には、こゝ
に來て慙くは云ふなりけり。案じてそれまでは寐ね
給はず。

少時音なければ、彼方に立てる小親の方を視返り
たり。

頭巾深と被れるが、駒下駄のさきもて、地の上叩
いて、せはしく低き音刻みながら、手をあげて打ち
招く。來よ、もの言はむとする状なり。心に懸りて
行かむとする時、靜に兩戸の戸一枚ソト其半ばを引
き給ひつ。

楓の上に明さして、小灯の影こゝまでは届かず月
の光に消えたり。と見る時、立姿あらはしたまひし
が、寝みだれて居たまひき。

横顔のいと白きに、髪のかゝりたるが、冷き風に
揺ぐ、欄干に胸少しのりかけたまひぬ。

「お歸ですか。」

「唯今。」

「遅かつたから姉さんは先へ寝て居たがね。」

言ひかけて四邊を見まはし給ひし。小親の姿ちら

りと動きて、ものゝ蔭にぞなりたる。ふツと灯を吹

消したまひ、

「お待ちなさいよ。」

五

小親こちかわが方かたに歩あゆみ寄よりしが、また戻もどりぬ。内うちより
枢外くわいす音おとして、門かどの戸との開あいたるは、跫音あしおともせざり
しが、姉上あねうへの早はや二階にかいを下おりて來きた給たまひたるなり。

「……・……・寒さむいこと。」

羽織はおりの兩袖りやうそで打合うちあはせて、靜しづかに敷居しきみを越こえ給たまひぬ。

「晚おそかつたのね。」

「あのね、面おも白しろかつたんだよ。」と言いひたるが、
小ちひさき胸むねのうやすち安やすからず。目めには小親こちかの姿すがた見みゆ。

「それは、好ようございましたけれど、風邪かぜをひく
と不可いけません。餘あまり晚おそくならないうちに、今度こんどから
お歸かへりなさいよ。」

「はい。」

姉上あねうへはなほ氣遣きづかはしげに、

「そして、まだ内うちへはお入いりでないのでせうね。」

「まだ。」

しばらく考かんがへ給たまひしが、

「それではね、私わたしが此處こゝに見みて居あますからね、貢みつぎ
さん、潛そつと行いつて、あの、格かう子しまで行いつて、見みて來き

て御覽。
」

深き思ひに沈みつゝのたまふやう見えれば、いぶかしさに堪へざりし。

「何うしたの、私の内は何うしたの。」

「いえ何うもしませんけれど、少し何んですから、まあ、潜と行つて見て入らつしやい。」

果は怖氣立ちて、

「嫌だ、恐いもの。」

「ちつとも恐いことはない。私がこゝに見て居ますよ。」

われは立放れて拔足しつゝ、小路の中を横ぎりたり。見返れば姉上の立ち給ふ。また見れば、小親居處を替へしが尚立てり。

密にわが家の門の戸に立寄りぬ。何事もあらず、内はいと静なり。かゝる時ぞ。いつもわが獨寝の臥床寂しく、愛らしき、小さき獣に甘きもの與へて、寝ながら其食ふを待つに、一室の内より、「丹よ、」
「すがはらよし」など伯母上、餘所の客など聲に云ふが襖漏れて聞ゆる時なり。今宵もまた

然ならむ、と戸に耳を付けて聞くに、たゞ寂然とし
たれば、可し、又拔足して二足三足ぞ退きたる。

ど、ど、どツといふ響、奥の方騒がしく、あれと
言ふ聲、叫ぶ聲、魂消る聲の忽ち起りて、俄にフツ
と止みたるが、一文字に門口より鞠の如く躍り出で、
白きもの空を駈けて、むかひなる屋根に上るとて、
凄じき音させしは、家に飼ひたる猫なりき。

只ばかりありて、身を横ざまに、格子戸にハタと
あたりて、呻きつゝ、片足踏出で、
追ひ來し者ありて引捉へ、恐しき聲にて叱りたるが、
引摺りて内に入りぬ。咄嗟の間に、われ警官の姿を
見たり。慌てゝ引返す、小路のなかばに、小親走り
來て手を取りつ。手を取られしまゝに、姉上の立ち
給へる廣岡の戸口に行きぬ。

三人かくは立ならびしが、未だものいはむとする
心も出でず。呆れて茫然と其方を見たる、楓の枝ゆ
ら／＼と動きて、大男の姿あり。やがて礎と地に落
ちて、土蜘蛛の窄む如く、圓くなりて踞りしが、ま

たゞく間に立つよとせし、矢の如く駈け出して、曲
り角にて見えずなりぬ。

頭巾をば搔取りたる、小親の目のふち紅かりき。

「貴女。」

聲かくるに、心着き給ひけむ。はじめて顔を見合
せ給ひしが、姉上は、いともの靜に、

「はい。」

とばかり答へたまふ、此時格子の戸颯と開きぬ。

すかし見る框の上に、片肌脱ぎて立ちたるは、より
／＼今はわが伯母上とも行交ひたる、金魚養ふ女房
なり。渠は片肌脱ぎたるまゝ、繩もて後手に縛めら
れつ。門に出でし時、いま一人の警官後より出で、
毛布もて其肌蔽ひたり。續きて染の顔見ゆ。あとな
るは伯母上なりき。

假小屋

—

樂屋なる居室の小窓と、垣一重隔てたる、廣岡の
庭の隅、塵塚の傍に横はりて、丈三尺餘、周圍凡二
尺は有らむ、朽目赤く缺けノ、て、黒ずめる材木の、
其本末には、小さき白き苔、幾百ともなく群り生ひ
たり。

指して、其を、舊のわが家なる木戸の際に、路を
蔽ひて繁りたりし彼の青楓の果なりと、繼母の語り
し時、われは思はず涙ぐみぬ。

「この變りました事と云つたら、まるで夢のやう
で、私でさへ門へ出ては、時々茫乎して見る事がご
ざいますよ。眞に貢さんなんぞ、久しぶりでお歸ん
なすつたが、些とも故郷らしい處はありますまい。」
と繼母は庭に立ちてぞ語れる。

然しか矣り、町まちの中なかにても、隣となりより高たかかりし、わが二階にかい家のや、今いまは平家ひらやに建直たてなほりて、煙草屋たばこやの店開みせひらかれたり。扇折あふぎをりの住すみし家は空むなしくなり、角かどより押廻おしまはせる富家ふかの持地もちとなりて、黒くろき板塀いたべ建て廻まはされぬ。

其そのあたりの家いへはみな新木造あたきづくりと成なりたり。小路こうぢは家いへを切開きりひらきて、山やまの手の通とほりに通つうずるやうなしたれば、人通ひとほりいと繁しげく、車馬しやばの往來わつらい頻しきりなり。

こゝに居ゐて遊あそぶ小兒等こどもら、わが知しりたるは絶たえてあらず。風俗ふうぞくもまた異かはりて見みゆ。わが遊あそびし頃ころは、うつくしく天窓あたまそりたるか、然さらぬは切禿きりかむろにして皆梳みなすいたるに、今いまは盡ことごとく皆毬栗みないぐりに短みじかく剪はさみたり。しらくも頭あたまの兒こ一人目ひとりめに着ききぬ。

總すべてうつくしき女をんなあらずなりて、むくつけなる男をとこぞ多おほき。三尺帶前さんじやくあひまへに緊しめて、印半纏しるしばんてんき着きてたるものなんど、をさなき時ときには見みもせざりし。

町まちも恂かうは狭せまからざりしが、今いまはたゞ一跨ひとまたぎ二足ふたあし三足みあしばかりにて、向むかひの雨落あまおちより、此方こなたの溝みぞまで互わたるを得うるなり。

筋向ひなりとわれは覺ゆ。かの石の鳥居まで、わが家より赴くには、路のほど最と遙なりと思ひしに、何事ぞ、たゞ鼻の先なる。宮の境内も實に廣からず、引抱へて押動かせし百日紅も、肩より少し上ぞ稍なる。仰いで高し厳しと見し國麿が門の冠木門も、足爪立つれば脊届くなり。

さて其國麿はと想ふ、渠はいま東京に軍人にならむとて學問するとか。烏帽子被りて、拂掉りし彼の愛らしき兒は、煎餅をば焼きつゝありとぞ。物干棹持てりしは、縣廳に給仕勤むるよし。いま一人、また一人、他の一人にはわれ偶と通にて出合ひたり。其時渠は道具屋の店に立ちて、皿茶碗など買うたりき。

皆幸なるべし。

伯母上は如何にしたまひけむ、もの賭けて花がるとし給ひたりとて、警察に捕へられたまひし後、一年わが縣に洪水ありて、此町流れ、家の失せし時にも何の音信も無かりしとか。惟ふに、身を恥ぢて何

處にか立去りたまひしならむ。彼時の、其夜より、
直ちに小親に養はれて、斯く健に丈のびたる、われ
は、狂言、舞、謡など教へられつ。然れば此一座の
為には益なきにもあらぬ身なり。こゝに洪水のあり
し事は、一昨年なりけむ、はた其前の尚ほ前の年な
りけむ、われ小親とゝもに、伊豫の國なる松山にて
興行せし時間及びつ。恚るべしとは思はでありし、
今年また此地にて興行せむとて、一座とゝもに來り
たる八年前のふるさとの目に見ゆるもの皆かはりぬ。

たそがれに戸に出づる二代目のをさなき兒等、最早野衾の恐なかるべし。舊の彼の酒屋の土藏の隣なりし觀世物小屋は、あとも留めずなりて、東警察とか云ふもの出來たり。

一座が掛りたる假小屋は、前に金魚養ひし女房の住みたる家のあとを、其隣、西の方、二軒ばかり空地となりしに建てられつ。小さき池は、舞臺の眞下になりたれば、恰も可しとて、興行はじむる時、大瓶一個、俯向けて埋めたり。こは鼓の音冴えさせむとて為たるなりき。

揚幕より推出されて、多勢の見物の見る目恥しく、しのぶ、小稻とゝもに狂言のなかに立交りて、舞臺に鞠唄うたひし聲の、あやしく震ひたるも多日がほどぞ。

振のむづかしき、舞の難き、祭禮に異様なる扮装して大路を練りありく其とは同じからず。藝に忠に

して、技に實なる、小親が世に於ける實の品位は神ありて知り給はむ、うつくしき蒲團に坐る乞食よと、人の口さがなく謂は言へ。
何か苦しかるべき。この姿して、この舞臺に立ちて、われは故郷の知人に對して聊も恥づる心なかりしなり。

されども知りたるは多からず。小路を行交ふ市人も凡てわが知れりしよりは著しく足早になりぬ。活計にせはしきにや、夜毎に集ふ客の數も思ひ較ぶればいと少し。

物語の銀六は、大和巡する頃病みてまかりぬ。小六はおいたり。しのぶも髪結ひたり。小稻はよきほどの女房とはなりぬ。

其間、年に風雨あり。朝に霜あり。夕に雪あり。世の中とかく騒がしかりければ、興行の収入思ふまゝならで、今年此地に來りしにも、小親は大方ならず人に金借りたるなり。

樂しき境遇にはあらざれど、小親はいつも樂しげ
なりき。こなたも姉と思ふ女なり、姉とも思ふ人な
り。

然りながら、こゝにまた姉上と思ひまゐらせし女
こそあれ。

ふる里の空のなつかしきは、峰の松の左に傾きて
枝を垂れたる姿なり。石の鳥居なり。百日紅なり。
砂のなかなる金色の細羸なり。軒に見馴れしと思ふ
蜘蛛の巣のをかしかりし状さへ懐しけれど、最も慕
はしく、懐しき心に堪へざりしは、雪とて繼母の女
なる、彼の廣岡の姉上なりき。

伯母上に其あしきことありし時、姉上は廣岡の家
に來よとのたまひぬ。小親は狂言の樂屋に來れと言
ひぬ。二人の顔を見かはして、わが心動きしはいづ
れなりけむ。繼母の聲したれば、ふと小親のあたゝ
かき肩掛の下に、小さきわが身體ひそみにき。

寂しかりしよ、わかれの時、凍てたる月に横顔白
く、もの憂きことに驚れ給ひし、日頃さへ、弱々し

く、風にも堪へじと見え給ふが、寢着姿の肌薄きに、
折から身を刺す冴なりし。悵然として戸に倚りて遙
に此方を見送りましたまひし。あはれの佛眼前を去らず、
八年永き月日の間、誰が此思はさせたるぞ。

廣岡の繼母に、恚て垣越に出會ひしは、ふるさと
に歸りし日の、二十日過ぎたる夕暮なりけむ。

舞臺には隣間近なり。こゝに居ても、其聲の聞え
 やせむかと、夜毎に枕を欹てなどしつ。おもて立ち
 て訪づれむは、さすがに憚りありたれば、強ひて控
 へたり。餘所ながら姉上の姿見ばやと思ひて、木槿
 垣の有りしあと、思ふあたりを、そゞる歩行して、
 立ちて、伺ひし其の暮方なりき。
 ふと這の繼母とわれは出違ひつ。

幼顔は覚え染みて忘れざりけむ、一目見るよりわ
 れをば認めつ。呼懸けられたれば隠れも得せで、進
 寄りて、二ツ三ツものいふうち、青楓の枯れたるを
 はじめとして、繼母はいたづらに數々の其の昔をぞ
 數へたる。

「あんたに面と向うては言悪い事ぢやがの。此の
 楓の樹な、はや見るたびに腹が立つ。憎い奴で、水
 の出た時にの、聞いてくんなされ。」

あんたの家も、私家も、同一に水びたり。根太の

弛んだはお互様ぢやが、私^{わし}が家^{いえ}など、随分^{ずぶん}と基礎^{どだい}も固^{かた}し、屋根^{やね}もどつしりなり、ちよつとや、そつとぢや、流^{なが}れるのぢや無^なかつたに、其^{その}時^{とき}さの、もう洪水^{みづ}が引^ひき際^{ぎは}と云^いふに、洪^{どう}とそれ一^{ひと}瀬^せに成^なつて打^ぶつ着^くると、あ^あんたの内^{うち}の此^{この}楓^{かへで}の樹^きが根^ねこぎに成^なつて、どんぶりこと浮^うき出^だいてからに、宅^{うち}の、大^{だい}黒^{くろ}柱^{ちゆう}に突^つき當^{あた}つたので、其^{それ}が為^{ため}に動^{うご}き出^だいて、とう／＼流^{なが}れたと云^いふもんぢや。ハヤ實^{じつ}に・・・誠^{まこと}に、何^{なに}も何^{なに}も、それを怨^{うら}むのぢやありやせぬけれど、何^{いつ}時まで經^たつても此^{こいつ}奴^{やつ}の憎^{にく}いは忘^{わす}れられませぬ。因^よつて、お宮^{みや}様の段^{だん}にしがらんで、流^{なが}れずに残^{のこ}つて居^あたのを、細^{ほそ}い處^{ところ}は焼^やいて了^{しま}うたが、これだけは残^{のこ}して置^あいて、腹^{はら}の立^たつ時^{とき}は見^みて居^あます。」

其^{それ}を楓^{かへで}の知^しることか。われは聞^きくに堪^たへざれば、冷^{ひや}かに去^さらむとせしが、この繼^ま母^{はは}に、其^{その}女^{むすめ}のこと、なつかしきわが姉^{あね}上^{うへ}のこと問^とはむと思^{おも}ひたれば堪^{こら}へてゐ^たむ。

「そして何^{なに}か、今^{いま}あ^あんたは隣^{となり}に勤^{つと}めて居^あなさるの
かな。」

輕んじ賤むる色は其面に出でたれど、われは逆ら
はで頷きぬ。彼の人の繼母なれば、心からわれも渠
に對しては威なきものと成れるなるべし。

「うゝ、何、それでも結構ぢや。口すぎさへ出來
れば、なあ、あんだ。」

たゞ微笑みて見せぬ。姉上のこと疾く語らずや、
と思ふのみ。

「えゝ、處で、おゝそれさ、あんだの一座の中ぢ
やさうなの。えゝ、何とかいふ、別嬪が一人居なさ
るさうぢやな。何とか言うたよ。あんだ、知つてぢ
やらう。」

と言ひかけて少し歩み寄りたり。其不快なる顔、
垣の上に又ト出でゝ、恰も梟首せられたるものゝ如
くに見ゆ。

「小稲ですか。」

「小……稲、いや、違つた。稲ぢやない、
稲ぢやない、はて、何とか言ふ。」

眉を顰めながら顔を斜にす。太く考ふる状なれば、
敢て其意を迎へむとはあらねど、かりにも彼の女

の母はなれば、われは遂つにわが惜おしき小親こちかの名語なりた
り。

「違ちがひますか、小親こちか。」

「うむ、それ／＼、それ／＼其その小親こちかと言いふのぢ
や。小親こちかぢや。は／＼／＼。」

蓮葉はすはなる笑聲わらひこゑ、小親こちかにや聞きえむかと、思おもはず樂屋がくや
なる居室あまの方見かたみられたり。

繼母まはは憚はる状さまなく、

「其その小親こちか、と言いふのは、あんだ、中なかが好よいのか

な。

「何なんですね、小母をばさん。」

四

「はツ／＼／＼、可愛がられておいでぢや。私
は早あんだが掌へ乗つかるやうな時の事から知つと
るで、そこは豪いもの。顔を見ると丁と分ります。
可愛がられると書いてある。」

「快よからずニタ／＼笑ひて、

「そして其の小親と云ふのは幾歳におなりだ。

は／＼、別嬪盛ぢやと言へば、十七かな、八くら
ゐ？」

「いゝえ、二十二。」

「む、二十二は丁度いゝ。二十二は好い年ぢや。

丁度其位な時が好いものぢや。何でも其の時分が盛
ぢや。あんたも佳い別嬪に可愛がられて羨ましいの。
いんえ、隠しなさるな、書いてある、書いてある。」

「小母さん、何ですな。」

「何でも無いが少し其談話があるで、何ぢやよ。

お前さんは眞個に小兒の時から可愛らしかつた。色
が白くての、ぼちや／＼と肥つて、頬ツペたへ嚙り

つきたいやうな、抱だいて見みたいやうな、いや最もう一ちよつ見ると目めがなくなるくらゐぢやつた。それも然さうかい、あなたの母おつかさん様はな、何でも此このあたりに評判ひやうばんの美いい女をんなで、それで優やさしくつて、穩をんたう當たうで、人柄ひとがらで、まことに愛あいくるしい、人好ひとずきのする、私わしなんか女をんなぢやが、とろ／＼とするはど惚ほれて居ゐました。其腹そのあなかの貢みつぎさんぢや。これが又女またをんなの中なかで育そだつたと言いふもので申まをし分の無むいお稚ちこさま兒ま様なに出で來きて居ゐるもの。誰だれでも可か愛はいがるよ、可か愛はいがりますともさ。は／＼、内うちのお雪ゆきなんかの、彼あんな内氣うちきな、引込ひっこ思案みあんな女こぢやつたけれど、もう、それは、あなたの事ことと言いうたら、宛然まるで狂氣きちがひ。起きると貢みつぎさん、寝ねると貢みつぎさん、御飯おまんまを頂いたく時ときも貢みつぎさん、何でも貢みつぎさんで持切もちきつてな、あなたが此地こつちに居をなくなつても、今頃いまごろはどうしておいでなさるぢやろ。船ふねの談はなしが出でりや、お危あぶない。雨あめが降ふりや、寂さびしかる。人ひとなつゝこいお兒こぢやつたから、何どんなに故郷こきやうへ歸かへりたかる。風かぜが吹ふけば、風かぜが吹ふく、お風邪かぜでも召めすまいかと、それは／＼言續いひつゞけ。嘘うそでは無ない、神信かみしん心くもして居ゐたやうぢやが、併しかし大おほきくおなりで、お達者たつしやなやうに見みえる。まあ、何なにより結構けつこう。

今では能役者と言ふものぢやな。はゝゝゝ、役者々々。はて、うつくしい、能役者は亦上品で、古風でいいもんどぢやよ。私も昔馴染ぢやから、これ深切で言ひますが、氣を着けなされ。む、氣を着けなさい、女では失策るよ。若い時の大毒は、女と酒ぢや。お酒はあがりさうにも見えぬけれど、女には、それ、可愛がられさうな顔色ぢや。

いんえ、串戯ではない、嘘ではない。餘所に面白いことが十分あると見えて、それ、たま／＼で、顔を見せても、雪の雪の字も言ひなさらぬ。な、彼の兒も、あなたには大きに苦勞をしたもんどぢやが。

早や懺悔だと思ひなさい。私もあの時は、意地が張つて、根性が悪うて、小兒が、其嫌ひぢやつたので、憎むまいものを憎みました。が、もう年紀も取る。ふツつりと心を入れかへました。優しい女での、今もそれ言ふ通り、餘りあなたを可愛がるもんぢやから、私は羨しいので、つい、それ嫉妬を焼いて、ほんに、貢さんの半分だけなど、私を可愛がツてくれたらなと、の、嫉妬の故に、はゝゝゝ、あん

たにも可い顔見せず、あの女にも辛かつたが、みんな貢さん、あんたの故ぢや。

ほんに、其位までに、あんたを思つて居るものを、何と、貢さん、私の顔を見ながら、お雪は何うした、姉さんは達者かと、一言ぐらゐは、何より先に云つてくんなされても可さうなものを、小親に可愛がられるので、まるで忘れるとは、餘りな、薄情だ。

藝人に成れば其様ものか、怨ぢやよ。」

俄に肅やかなる言語ぶりなり。

其^{その}時^{とき}の我^{わが}顔^{かほ}を、繼^ま母^ははぢつと見^みしが、俄^{には}に笑^{わら}ひ出^だしぬ。

「あの眞^ま面^じ目^めな顔^{かほ}が、はゝゝ、串^{じやう}戯^{だん}ぢや、串^{じやう}戯^{だん}ぢや。

何^{なん}の、そんな水^み臭^{すくさ}い人^{ひと}でない事^{こと}は、私^{わし}が丁^{ちやう}と知^しつて居^ゐる。むゝ、知^しつとるとも。

杏^{あん}や、桃^もを欲^ほしがつた時^こ分^ろとは違^{ちが}うて、あ^いんた色^{いろ}氣^けが着^ついた。それ^な、舊^{もと}のやうに、小^を母^ぼさん、姉^{ねえ}さんは、と言^い悪^{にく}い。處^{ところ}で、つ^い、言^いひそゝくれてお了^{しま}ひのである。何^{なに}、むかし馴^{なじ}染^みぢやあるけれど、今^{いま}では女^{をんな}と稱^いふものが分^{わか}つたで、女^{をんな}と男^{をとこ}、男^{をとこ}と女^{をんな}、女^{をんな}と男^{をとこ}と云^いふことが胸^{むね}にあるに因^よつて、私^{わたし}に遠^{えん}慮^{りよ}をして、雪^{ゆき}のことを一寸^{ちよつと}口^{くち}へ出^だし悪^{にく}い、とまあ言^いうたわけぢやの、違^{ちが}ふまい。むむ。」

面^{おもて}を背^{そむ}けてわれは笑^{わら}ひぬ。繼^ま母^はは打^{うち}顔^{なう}き、

「それ見^みなされ。そこは何^{なん}と言^いうても小^を母^ぼさんぢや。胸^{むね}の中^{なか}は、ちやんと見^み通^{とほし}の法^{ほふいん}印^{さま}様[。]。

それで私も落着いた。いや、然ういふ心なら、モ些とも怨みには思ひませぬ。何うして、あんたのやうな優しい兒が、如何に餘所に良いことが出来たとて、さつぱりふいと、此方を忘れなさるとは思やせなんだが、其處は人情。また何うであると思つたで、一寸氣を引いて見たばかり。

悪く取られては困ります。こんな婆々が、こんな顔で、こんな怨みつほい事を言つたとて、何んとも思ひはしなざるまいが、何ぢやよ、雪が逢うても斯う言ひます。いま私の言つたやうな事を言ひますわいの。それはの、言ふわけがあるからで。

けれども、彼の女は、じたい、無口で、しんみりで、控目で、内氣で、何うして思ふ事を、さらけ出して口で云へるやうな性ではない。因つて、それ、私のが、其心を察して、彼の女の代りに言ひました。

雪ぢやと思つて聞きなさい。そこは、私が丁とあんなの胸の裡を見透したやうに、あの女のお腹なかも破つたやうに知つとるで、つい、嫌味なことを言つたもの。

あんたが然うした心なら、彼の女が何、何うして居ようと、風が吹くとも思やせぬ。……泣いて居ようと、煩らつて居ようと、物食べられないで、骨と皮ばかりに成つて居ようと、髪の毛をニられて居ようが、生爪をはがれて焼火箸で突かれて居ようが、乳の下を蹴つけられて、呼吸の絶えるやうな事が一日に二度ぐらゐづゝは屹と有らうと、暗い處に日の目も見ないで、色が眞蒼になつて居ようと、踏にじられてひい／＼呻いて居ようと……其方の事ぢや、私は構はぬ。ふむ、世の中にはそんな事もあるものですか、妙だね、ふゝで聞き流いて、お能の姉さんと面白さうに、お取膳で何か召あがつておいで遊ばすやうな事もあるまいと思はれる。な、あんた。」

顔の色も變りたるべし。冷たき汗にわが背のうるほひしぞ。黙して聞かるゝことかは。堪へかねたれば遮りたり。

「姉さんは御機嫌ですか。」

繼母は太き聲にて、

「はい、生きては居ます。死にはせいで、あゝ、息のある内に、も一度貢さんの顔が見たいと云うての。」

「え！」

「然れど、然ういふ事口へ出しては謂はれぬ女ぢやで、言ひはせぬ。けれど、そこは小母さんちやんと見通し。ま、この大きくおなりの處を見たら、何んなにか喜ぶである。それこそ死なずに居た効があると、喜びますぢやろ。あゝ、ほんとうに。」

「小母さん、逢ひたい。」

「む、逢ひたい、いや、それは小母さん丁と見通し。」

「お目にかゝりたい、小母さん。」

「道理ぢや。」

「逢はして下さいな。」

と垣に伸上りぬ。繼母は少し退りて、四邊を見まはし、聲を潜め、

「養子のがの、婿がの、其の大變な男で、あんたを逢はしたりなんかしようもんなら……其れこそ。」

「貢みつぎさん、何を其その様なにお鬱ふさぎだ。此間このあひだから始しじう終うくよ、しておいでぢやないか。言いつてお聞きかせ、何どうしたの。何なにも私わたしに秘かくす事ことは無ないわ。」

二三日にちらい來こ、小親こちかわれを見ては憂きづ慮かひて、恚かくは問とたりき。心こころなく言いふべきことにあらねば語かたらでありしが、此夜このよは渠かれとわれとのみ、傍かたはらに人ひとなき機をりなり。

「私わたしの事ことぢやないよ。」

「おや他人ひとのことで苦勞くらうしてるの、お前まへさんは生なま意氣いきだね。」

と打うち微笑ほくそむ。浮うきたる事ことにはあらず、われは眞ま顔がほになりぬ。

「だつて何なにも心配しんぱいをするのは、我身わがみの事ことばかりなものではない。他人ひとのだつて、為しなきやならない心配しんぱいなら為しようぢやないか。お前まへさんだつて、私わたしのこ

とを心配しんぱいおしだから、それで聞きくんぢやないか、何ど

うしたツて？」

「はい、はい。澤山心配をしておあげなさいまし。御道理なことだねえ、ほゞ。」

「また、そんな、最う言ふまいよ、詰らない。」

「ま、承りませう。可いからお話しなさい。大方、また廣岡のお雪さんのこツたらう。」

「え、知つてるの。」

「紅花染だね。お前さんの心配はと言ふと、何時でもお極りだよ。また何うかしたのかい。」

「あゝ、養子が大變だと、酷いんだとさ。あの、恐しい繼母が、姉さん、涙を流して、密と話した位だもの。大抵ではないと、然うお思ひ。お雪さんが可哀相つちやない。やう／＼命が有るばかりだと言ふんだもの。姉さん、眞面目になつて聞いておくれ。いやに笑ふねえ。」

「ちつと妬けますもの。」

「詰らない、ぢやあ言ふまい。」

「いゝえ承りませう。酷いかね、養子にや可いのではないものだと言ふけれど、其方が酷くツて、此方が苛められるのは珍しいね。そして、あの繼母が着いてるぢやあないか。貢さんに聞いたやうでは。養

子に我儘なんかさせさうにも思はれないがね。」

われも初めは現在小親の疑ふ如く疑ひたるなり。

「其がね、姉さん、皆金子のせみですとさ。洪水が出て、家が流れた時、舊あつた財産も家も皆なくなつて了つてね、仕方が無い時に其養子を貰つたんだつて。」

「持參金かね。」

「え、大分の高だといふよ。初ツからお雪さんは嫌つて居た男だつてね。私も知つてる奴だよ。萬吉でツて、通の金持の息子なの。ねえ、姉さん、何う言ふものか萬の字の着いたのに利口なものは居ないよ。馬鹿萬と云ふのがあるしね、勿萬だの、それから鼻萬だのツて、皆嫌な奴さ。ありや名でもつて同じやうな申分のあるのが出来るのは、土地に因るんだとね。却つて利口なものも有るんだつて。」

「また、詰らないことを言出したよ。幾歳だねえ、お前さんは。そんなこと云つて居て、人の心配も何も出来るものぢやない。」

「だつて、其に違ひないのだ。あのお雪さんの養

子しになつてるのは、矢張り萬まんといふ名なだからさ。私わたしがね、小ちひさい時とき、萬まんはもう大おほきな身からだをして、良よい處ところの息子むすこの癖くせに、萬金丹まんきんたん賣うりのね、能書のうがきを繪えびらに刷すたのが貰もらひたいつて、革靴かばんを持もつて、お供ともをして、嬉うれしがつて、威張あばつて歩行あるいた兒こだものを。誰たれが、そんな。

だからお雪ゆきさんも嫌きらつて居ゐたんださうだけれど、どつさりお金子かねを持もつて來くると言いふので、あの繼母まははがね、是非ぜひむこ婿むこにしよう、為しなけりやあなりませんと、然さう云いつたんだ、と。お雪ゆきさんが嫌いやだと云いつたけれど、
ど・・・・・あの、姉ねえさんも知しつてるはずだよ。・・・・・私わたしの内うちに楓かへでの樹きがあつて、往來わうらいへ枝えだがさして茂しげつてたのが、彼處あそこの窓まどへ届といたので、内うちが暗くらくつて、仕様しやうがない。貢みつぎの内うちへ掛合かけあつて、伐きらして了しまふと言いつた時分じぶんに、私わたしは何なにも知しらないけれど、お雪ゆきさんが、あれだけは、そんなかはいさうな事ことをしないで下ください。後生ごしやうですつて、止やめたんだ。・・・それがあの洪水みづづの時ときに流ながれ出して、大丈夫だいじょうぶだつた廣岡ひろをかの家うちへ衝突ぶつつたので流ながれたらう、誰だれのおかげだ。・・・・・」

「……皆お前の所為ぢやないか。あの時代
 らしてさへ置けば、こんなに路頭に立つやうになる
 まで、家を流されるんぢやなかつたツて、難題を言
 つて、それで、お雪さんも仕方なしに、其養子をし
 たんだツて。……其が酷いんだ。」

小兒の内は間抜けのやうだつたけれど、すつかり
 人が異つて、癩癩持の亂暴な奴になつたと見えるん
 だよ。……姉さん、年紀がゆくと變るものか
 知ら。」

小親は火箸もて炭を挟みたる手を留めて、

「そりや、變るね。貢さんだツて考へて御覽なさ

い、大そう異つたぢやあないか。」

「私は何、大きくなつたはかりだね。」

「いゝえ、些と憎らしくもおなりだよ。」

「然うかね。」

「其の口だよ、憎らしい。」

「ぢや澤山憎んでおくれ。可いよ、何うせ憎まれ
 ツ兒だ、構やあしない。」

小親は清しき目を二りぬ。

「いゝえ、可愛がるよ。」

「そんな事いふからだ。今でも皆でなぶつて不可い。いろんな事をいふもんだから、人の前でうつかりした口も利けまいぢやないか。一緒に居て、さうして、何も私は姉さんにものを云ふのに、遠慮をすることは要らないわけだと思ふけれど、皆がなぶるから、つい、何でも考へて為たり、考へてものを云つたりしなけりやならないよ。窮屈で弱つてしまふ。皆が何うして如彼だらう。」

莞爾して、

「然やうでございますね。」

「眞個にお聞き、眞面目でさ。」

「畏まりました。」

「そら、然うだから不可いよ。姉さん、姉さんと云ふものはね、年のいかない弟に、そんなことを為るもんぢやあないよ。ちやんと姉顔をして澄して居なくつちやあ。妙にお客あしらひで、私をばお大事のものゝやうにして、其の癖ふざけるから、皆が種なこと云ふんぢやアあるまいかね。立派に姉さんの

顔をかほして、貢みつぎ、はい、といふやうにして御覽ごらん。をか
しなことは無なくなるに違ちがひないから。さうしてなか
よくして、ね、可愛かはいがつておくれ。私わたしも心細こころほそいんだ
もの。」

いひかけて顔かほを見合みあせぬ。小親こちかは炭すみを繼つぎて火箸ひばし
もて、火ひをならしながら、良やありて後のちしめやかに頷うなづ
きたり。秋あきの未すゑなれば月つきの影冷かげひやかなりし。小親こちかは後うしろ
むきて其方そなたを見みたる、窓少まどすこし開あきたりしが、見みたる
まゝ閉しめむともせで、また此方こなたに向むきぬ。

「そして、お雪ゆきさんは何どうしたの。」
「それがね、酷ひどいんだ。他人たにんの口くちから言いつたのな
ら何なんだけれど、あの、繼母まははが我身わがみで我身わがみの邪慳じゃけんだつ
たことを私わたしに話はなしたんだよ。」

そんな風ふうにして、無理むりに推着おつつけて婿むこを取とらしたが、
實じつは何なに、路頭ろとうに立たつなんて、それほど窮こまりもしなん
だのを、慾張よくばりで、お金子かねが欲ほしさに無理むりに貰もらつた
が悪わるいことを為したつて、言いふんだ。

其がと云ふと、養子の奴が、飛んだ癩癩持で、別に、他に浮氣なんぞするでもなしに、朝から晩まで、お雪さんを苛めるんだつてね。今まで苛めて居た繼母さへ見るに見兼ねると云ふんだから酷いではないか。ねえ、姉さん。

其上、はじめお雪さんを無理強ひにした言草が、私の内の楓の樹で、それをお雪さんが太く庇つて伐らさなかつたから此様ことが起つたんだつてね、．．．．そして何故楓の樹を伐らさなかつたらう。それは一ツ貢さん、あなたが考へて見ておくれつて繼母が言ひましたさ。」

煙管をば取りあげつ。小親は煙草の箱弾きながら、「そして。」
「私、考へた。」

「何だか分りませんツて、繼母には言つたけれど、考へて見ると、何だかねえ、遠い處に、幽かすかに小ちひさい、楓かへての樹きのこんもり葉はの繁しげつたのが見えて、其その緑みどり色が濡ぬれて居ゐるのに、太陽たいやうがさして、空そらが蒼あをく晴はれた處ところに、キラ／＼とうつくしいものが振ふり下さがつて・・・其それにね、白しろい手てで、高たかい處ところの枝えだに結ゆひつけておいでのお雪ゆきさんが、夢ゆめのやうに思おもひ出だされるんだよ。だもんだから、何だか私わたしのために、お雪ゆきさんが、そんな養やう子を推おつ着くけられて、酷ひどいめにあはされて居ゐるやうにね、何なんといふことなしに、我わが身みで極きめてしまつたんだもの。可か哀はい相さうで堪たまらないんでね、つい、鬱ふさぐの。」

言いふほどにまた幻まぼろし見みゆ。空そら蒼あをく日ひの影かげ花はなやかに、緑みどりの色いろ濃こき楓かへての葉はに、金きん紙し、銀ぎん紙しの蝶てふの形かたちひら／＼と風かぜにゆれて、差さしのばした給たまふ白しろく細ほそき手ての、其その姉あね上の姿すがたながら、室まの片隅かたすみの暗くらきあたり鮮あざ麗やかにフと在あるを、見み返かへせば、月つきの影かげ窓まどより漏もれて、青あをき一いち條てうの光ひかり、疊たぐみの上うへに映さしたるなり。うつとりせしが心こゝろ着つき

ぬ。此方には灯影あかく、うつくしき小親の顔むかひあひて、額近きわが目の前に、太く物おもふ色なりき。

われは堪へず俯向きぬ。

「そしてまあ、其繼母はまた何だつて遠まはしに、貢さんの故のやうに推つけて聞かしたんだらうね。

お前さんに何うか為てくれるといふのかね。貢さん、お前さんが心配をすれば何うにか成るとも言ふやうな事を繼母が知つてるにも承れるがねえ。一體何うしたといふんだらうね。」

小親は身に沁みて聞きたりけむ、言ふ聲も落着きたり。

「でね、繼母が然ういつたよ。貢さん、あなたは小親といふ人に可愛がられて居るんだらうツて。」

「お前さんは、何と言つたの。」

「黙つて居ました。」

「さうかい。」

「とばかり寂しく笑ひぬ。煙管は火鉢に横うたり。」

「何うしたの、姉さん。」

「何、可いよ。」

「だつてをかしいもの、ね、そりや私を可愛がつておくれただけれど……何だか、をかしいな

あ。」

「何が、え？ 何がをかしいの。」と口早にいふ、血の色薄く臉を染めぬ。

「何も氣をまはすことはないよ、眞面目ぢやあ困るわね。私あ何とも思やしない、串戯さ。何故ね、然う云ふことを聞いたら、そりや可愛がつてくれますとも、と恚うお言ひぢやないツて云ふのさ。串戯だよ、串戯だけれどもねえ、其位にさばけておくれだと、それこそお前さんの言草ぢやあないが、誰も冷かしたり、なぶつたりなんぞ為ないやうになつちまふわね。え、貢さん、さうぢやないか。しかし不可いかい。」

「だつて極が悪いもの。」

「何故さ。」

「何故ツて、然う云ふとね、他人は何だもの、姉弟だと思はないで、をかくし聞くんだからね。」

「何と聞えるんだね。」

「何だか、をかしい。」

「まあさ、何なんと聞きえるんだねえ、貢みつぎさん。」

「それはね、あの・・・。」

「何なんだね。」

「お能のうの姉ねえさん。」

「厭いやだよ！」

四

「しかし御察しのいいことね、繼母も何うして酒落てるよ。然う云つてくれたのなら、私や其人に禮を言はうや。貢さん、逢つたら宜しくと申しておくれ。」

「むかうでも然う云つたよ。小親によろしくツて。」

「何のこツたね。」
「其が、何だつて、其養子がね、大層姉さんのことを、美しい女だつてね、云つてるさうだ。」

煙管を落して、火鉢の縁をおさへつゝ、小親は新しくわが顔を瞻りぬ。

「何時か見物をしたんだらうね。」

小親はこれを聞きて笑を含み、

「貢さん、もう大抵分つたよ。道理でお前さんは妙な顔をしちやあ、此間つから私を見て居たんだわ。あゝ、そしてお前さんは何う思ひます。」

「何をさ。」

「何をつて、繼母はお前さんに私となががいいか

ツて聞いたらう。」

「そりや聞いたよ。今も話したやうに。」

「道理で。」

とまた獨り頷きつゝ、

「貢さん、そして何だらう、お前さんの口から、ものを私に頼んでくれと言やあしないかい。」

「えゝ。」

「云つたらうね、ほゝゝ、解つてるよ、解つてるよ。」

とまた笑へり。

「獨で承知をしてるのね、姉さん。」

「うつかりぢやあないわね、可いよ、萬更知らない方ぢやあなし、私も一度お目に懸つて、優しさうな可い方だと思つてるもの。お雪さんが那樣酷いめに逢つて居なさんなら、可いよ、貢さん、お前さんにつけて、其位なことならばしてあげようや。」

と靜にいふ、思ひの外なれば訝りもし、はた危みもしつ。

「解つてるの。姉さんが何うにかしておくれなら、其を言ぐさにして、不品行だからつて、其養子を出

して遣らう。そんな奴だけれど、唯、粗相があるの、不遇をするのツて、お雪さんを苛めるばかり。何も良人の権だから、其をとやかう言ふわけのものではない。他に越度は無いものを、立派な親類が澤山控へて居るにつけて、此方から手の出しやうがない。そんならつて、浮氣などするんぢや無し、生眞面目だから手も着けられないで居たのに、つひぞ無い、姉さんを見て、まるで夢中だから、屹度其何なんだつて。而して、何うかしておくのなら、もう一廉のものいひがつく。屹度叩き出してお雪さんを助けると繼母が云ふんだがね。――承知だ、宜しいツて、姉さん、何うして分つたんだね。何うして知つておいでなんだい。」

小親は俯向きたる顔をあげて、

「貢さん、お前さんは何とも思つちやあ居まいけれど、私は何だよ、お前さんの事はと云ふと、みんな夢に見て知つてるよ。此間だつて、今だから云ふんだがね、眞闇な處でね、あツと云ふ聲が聞えるから、吃驚して見ると、何だつたの。獣のね、恐いものに追懸けられて、お前さんと、お雪さんと抱き

合つて、お隣の井戸の中へ落ちたのを見て、はつと思つて目が覺めたもんだから。・・・」

われは慄然として四邊を見たり。小親は急に座を起ちしが、衣の裳踵にからみたるに、よろめきて八々と膝折りたる、其まゝ手を伸べて小窓の戸閉したり。月の明り疊に失せて、透間洩りし木の葉の影、浮いてあがるやうにフト消えて見えなくなりぬ。一室の内燈の隈なくはなりたれど、夜の色籠りたれば暗かりき。さや／＼と音さして、小親は半纏の襟引合せ、胸少し火鉢の上に蔽ふやう、両手をば上げて炭火にかざしつ。

「もつとお寄りでないか。貢さん、夜が更けたよ。」

五

裕あはせの上うへより、ソとわが胸むねを撫なで、

見みつ。

「薄うす着ぎのせみかね、動悸どうきがしてるよ。お前まへさん、そんなに思おもひ詰つめるものではないわ。そりやお雪ゆきさんのことを忘わすれないで、心配しんぱいをしておあげなのは、お前まへさんが薄情はくじやうでないからで、私わたしだつて嬉しいよ。ねえ、貢みつぎさん、實じつのある弟おとうとを持つたと思おもつて、人ひとのことに心配しんぱいをおしのも、私わたしは悪わるい氣きはしませんよ。けれども、そんなに思おもひ詰つめちやあ、眞個ほんたうに大だい事じな身體からだを何どうおしだえ。氣味きみの悪わるい夢ゆめだつたから、心しん配ぱいでならないので、稻いなちやんにも然さういつて、初終しよつち氣きを着つけて居ゐたんだもの。人ひとにかくれちや、繼母まははとちよい／＼おはなしのことも知しつてるんだよ。此方こつちから言いひ出だす分ぶんではなかつたから、知しらない顔かほで見みて居ゐたけれど、堪たまらないほどお鬱ふさぎだもの。可いいよ、もう何どうにかしてあげようや、貢みつぎさん。」

吐息といきもつかれ、

「ぢやあ、姉さん、あの養子を、だましてくれるの。」

「ま、しやうがないわね。」

「だつて、酷い奴だといふよ。」

「たかゞ田舎者さ。」

「そして、何うして？」

姉さん。「

「狸を御覧よ、ほゝ、ほゝ。」

「あゝ、一人助かつた。」 小親が顔の色沈みた

り。

「しかし、貢さん善いことだとは思ふまいね。」

胸痛かりし。われは答にためらひたり。

「善いことだとは思ふまいね、貢さん。」

其心俄に料りかねたる、胸はまた轟きぬ。

「私や、藝人でありながら、お前さんに逢つてから、随分大事に身を持つたよ。よ、貢さん、人に後指さゝれちやあ、お前さんの肩身が狭いだらうと思つたし、其上また點を打たれる身になるとね。」

小親引寄せて、わが手を取りたり。

「お前さんは何にも知るまいけれど、何うせ、何うせ、姉の役ツきやあ勤まらない私だけれど、姉だツて、よ、姉だツて、人に後指さゝれたり、些でも、お前さんと怗うやつて居ることの、邪魔になるやうな人が私に有つては厭だから、そりや随分出来にくい苦勞もしたものだ。何にも恩に被せるんぢやあない。怨をいふんぢやあない。不足を云ふんぢや無ければ。ど。ど。ど。貢さん、廣岡のお嬢さんの顔が見られるやうになりさへすりや、私や、私や、何うなつても可いのかい。よ、よ、私や何うなつても、可いのかよう。」

烈しく手の震ひたればか、何のはずみなりけむ、火箸横に寝て、其半ば埋れしが、見る間に音もなく、ものゝ動くともなく、灰の中にとぼ／＼と深く沈みたり。

「あら、起しますよ。」

「可いよ。」

わが指のさき少しく灰にまみれたれば、小親手首を持添へて、掌をかへしてぢつと見つ。下着の袖口

引出して拂ひ去るとて、はら／＼と涙をぞ落したる。

わが身體の筋皆動きぬ。

「御免なさい。」

小親は涙ぐみたるまゝ目を閉りぬ。

「御免なさい。私が悪かつた。」

さしうつむきて聲を呑みたり。

「悪かつた、姉さん、さげすんでおくれでない。」

廣岡の姉さんも私にやあ何んなにか優しくかつたらう。

母さんのなくなつた時から、好きな琴弾かなくなつて

おしまひだもの。此位な思を私がするのは、一度は

當前だつたと思つて、堪忍しておくれ。悪かつた、

眞個にさもしいことだつた、姉さん、姉さん。」

こたへなければ繰返しぬ。

「姉さん！」

ひたと寄り添ひ、肩を抱きて、屹と顔を見合せぬ。

「あれ！」

と叫ぶ聲、廣岡の家より聞えつ。

重井筒

—

井戸一ツ地境に挟まりて、わが假小屋にて其半を、
廣岡にて其半ばを使ひたりし、蓋は二ツに折るゝや
う、蝶番もて拵へたり。井戸の蓋と隔ての戸とを此
にて兼ね、一方を當てゝ夜毎には彼方と此方を垣し
たる、透間少し有りたる中より、奮發みたる鞠の如
く、衝と潜り出でゝ、戸障子に打衝る音凄じく、室
の内うちに躍り込をどむよと見えし、くる／＼と舞まひて四隅
の壁かべに突當つきあたる、出處でどころなければ引返ひきかへさむとする時とき、慌あわた
しく立たちたるわれに、又道またみちを妨さまたげられて、座中ざなかに踞うづくま
りたるは汚きたなき猫ねこなりき。

背せをすくめて四足しそくを立て、眼めを瞋いからして呻うなりたる
口くちには哀あはれなる鳩はと一羽はくはへたり。餌えにとて盗ぬすみ
しな。鳩はとはなかなば屠ほられて、羽はねの色いろの純白じゆんぱくなるが斑まだら
に血ちの痕あとをぞ印いんしたる。二ツ三ツ片羽かたはねは羽はねたゝきたれ
ど、早はや弱よわり果はてたる状さまなり。

「畜生！」

と鋭く叫び、小親片膝立て、身構へながら、落ちたる煙管の羅宇長きを、力籠めて掉かざせし、吸残りけむ煙草の煙、小さく渦巻きて消え失せたり。

「あ痛、あ、あ、痛。」

うつくしき眉を顰めつゝ、はたと得物を取落しぬ。

驚きてわが走り寄る時、遁路あきたれば潜り抜けて、猫は飛び出で、遠く走る音して寂然となりたり。

「何うしたんだね、姉さん、何うしたんだね。」

小親は玉の腕投げ出して、右手もて擦りながら肱を曲げ、手の甲を頬にあてゝ、口もて其脈の處を強く吸ひぬ。

「麻質かい、姉さん。」

と危ぶみ問ひたる、わが聲は思はず震ひぬ。

「あら、顔の色を變へて、眞蒼だね。そんなに吃驚したのかね、氣の弱い。」

却つてわれを激ましぬ。

「いゝえ、猫にも驚いたけれど、りゆうまちゝやあ無いかい、え、麻質ぢやあないかい。」

「ちよつとだよ。何でも無いんだよ、何をそんな

に。たかゞりゆうまちだもの、生命を取られるほどのことは無いから。」

「でも、私はもう、■麻質と聞いても悚然するよ。何より恐いんだ。何故ツてまた小六さんのやうに。」

「磔！」

言ひたる小親も色をかへぬ。太き溜息吻とつきて、
「鶴龜々々。あゝ、然ういつたばかりでも、私や胸が痛いよ、貢さん、ほんとに小六さんも何うおしだらうね。」

物語の銀六は、蛇責の釜に入りたる身の経験ありたれば、一たび其事を耳にするより、蒼くなりて、何とて生命の續くべきと、老の目に涙泛べしなり。されど氣丈なる女なれば、今なほ恙なかるべし。

小親いまだ其頃は、牛若の役勤めて居つ。銀六も健かに演劇の眞似して、われは哀なる鞠唄うたひつゝ、しのぶと踊などしたりし折なり。

恰もいま小親が猫を追はむとて、煙管翳したる其の状なりしよ。越前府中の舞臺にて、道成寺の舞の

半ばに、小六其撞木を振上げたるトタンに左手動か
ずなり、右手も筋つるとて、立すくみになりて、樂
屋に昇かれて來ぬ。

然らざりし以前より、渠はこの二麻質の持病に惱
みて、假初なる俚の上下にも、小幾、重子など、肩
貸し、腰を抱きなどせしなり。

月日に痛み重るを、苦忍して、強ひて装束着けた
りしが、其時より亦起たずなりき。

樂屋にては小親の緋鹿子のそれとは違ひ、黒き天
鵝絨の座蒲團に、蓮葉に片膝立てながら、繻子の
襟着いたる粗き豎縞の布子羽織りて被つ。帯も占め
で、懷中より片手出して火鉢に翳し、烈々たる炭火
堆きに酒の爛して、片手に鼓の皮乾かしなどしたる、
今も目に見ゆる。

手の利かねば、割膝にわが小さき體引挟みて、澁
面つくるが可笑とて、しば／＼血を吸ひて、小親來
て、わびて、引放つまでは執念く放たざりし寛濶な
る笑聲の、はじめは恐しかりしが、果は懐しくなり

て、その後より小さき手に目隠して戯れたりし、日
數もなく、小六は重き枕に就きつ。

湯を呑むにさへ、人の手かりたりしを、情なき一
座の親方の、身の代取て、其の半不随の身を賣りぬ。

買ひたるは手品師にて、觀世物の磔にするなりき。
身體は利かでも可し、槍にて突く時、手と足ニきて、
苦と苦痛の聲絞らするまでなれば。これにぞ銀六の
泣きしなる。

「ほんとにねえ、貢さん。」

小親こちかゆ行きて、泣く泣くなな小六ころくの枕頭まくらもとに其恐そのおそしきこと
 語りし時とき、渠かれの剛腹がうぶくなる、たゞ冷ひやかに笑わらひしが、わ
 れ／＼は如何いかに悲かなしかりしぞ。

其時そのときの小親こちか、今いまの年とし紀しならましかば、斷たちても何なん
 とか計はからひたらむ。あどけなき人ひとの唯優たゞやさしくて、親おや
 方かたに縋すがりたれど、内うちに居あては水みづ一つ汲くまぬ者ものなり。
 手足てあしの動うごかぬを何なににかせむ、歌妓うたひめにも賣うれざるを、
 塵塚ちりづかに棄すつべきが、目めざましき大金おほがねになるぞとて、
 北叟ほくそゑみ笑わらしたりしのみ。

そも／＼何なんの見處みどころありて、小六ころくに爾さる價擲あたひなげうちけむ、
 世よには賤いやしき業わざも多おほけれど、誰たれか十字架はりつけに懸からむと
 する。

向むかうづけに屋根裏やねうら高たかき礎柱はしりつけばしらに縛しばめられて、乳ちの下した
 發ひらきて衆ひとの前まへに、槍やりをもて貫つらぬかるゝを。これに甘あまん
 ずる者ものありとせむか、其婦人そのをんないかなるべき。

小六の膚は白かりき。色の黒き婦人にては、木戸に入るが稀なりとて、然る價をぞ拂ひしなる。手品師は詮ずるに半ば死したる小六の身の其うつくしく艶かなりし鳩尾一斤の肉を買ひしなり。諸人の、諸人の眼の犠牲に供へむとて。

賣られし小六はをさなきより、刻苦して舞を修めし女ぞ。恚て十年二十年、一座の座頭となりて後も、舞臺に烈しき働しては、樂屋に倒れて、其弟子と、其妹と、其養ふ兒と、取絶り立蔽ひて回生割を吞ませ呼び活けたる、技藝の鍛錬積りたれば、これを彼の江戸なる家元の達人と較べて何か劣るべき。

あはれ手品師と約成りて、一座と別れんとしたりし時、扇子以て來よ、小親。一さし舞うて見せむとて、留むるを強ひて、立たぬ足膝行り出でつ。小稻が肩貸して立たせられたれば、手酌して酒飲むとは人かはりて、おとなしく身繕ひして、肅然と向直る。

小親は膝に手を置きぬ。

揚幕には、しのぶと重子、涙ながら、踞居て待ち

たり。

一息つき、きつと見て、凜として、

(幕を！)

と高く聲かけぬ。開けと云ふなり。此聲かゝる時は、弟子達みな思はずひれ伏す。威なるべし。

さて聲に應じて、「あ」と答へ、棒を以て緞子の揚幕キリ、と捲いて揚げたれば、舞臺見ゆ。廣き土間棧敷風寂びて人の氣勢もなく、橋がゝり艶かに、板敷白き光を帯びて、天井の煤影黒く映りたるを、小六はぢつと見て立つたりしが、はじめてうるめる聲して、

(親ちゃん、)

とばかり礫と扇子落して見返りし、凄艶なる目の中に、一滴の淚宿したり。皆泣伏しぬ。迎の俤來たれば乗りて出でき。

可愛き兒の、何とて小親にのみに懐き寄る、はじめて汝が頬に口つけしはわれなるを、効なく渠に奪らるゝものかは。小親の牛若さこそとならば、いまに見よ、われ癒えなば、牡丹の作物蔽ひ圍む石橋の上立ちて、丈六尺なるぞ、得意の赤頭ふつて見せ

む。さらば牛若を思ひすてゝ、わが良き兒とやなら
むずらむ。

と病の床に小親とわれと引きつけては、二人の手
を取り戯れて、小親に顔赤うさせし愉快の女は、か
くて手品師が人の眼を眩惑せしむる、一種の麻薬と
なり果てたり。

過去りしことありのまゝに繰返せば、いままのあ
たり見るに似たり。

小親と顔を見合せぬ。

「よく覚えておいでだね。」
如何でわれ忘るべき。

いかで忘らるべき。時々起る小親が同一病の都度、
大方ならずわれは胸いたためぬ。

殊に今は隣家にて、**二**呀と一聲叫びたまひし姉上の
聲の、覚えあるのみならず、猫の不意にも驚かさ
れし、血の動きの尚ほ止まぬに、小親また腕を痛め
たれば、さこそわが顔の色も變りつらむ。

「姉さん、ほんとうに氣を付けておくれ、また此
上前が病氣にでもなつたら何うしよう。」

「案じずとも可いよ、ちよつとだわ。しかし小六
さんも何うして居るんだらう。始終氣に懸けちやあ
居るけれど、まだ何うにもしやうがないが、もう此
節ぢやあ、何處に居なさるんだか其さへ知れない位
だもの、ねえ、貢さん。」

いひ掛けつゝ打濕りて、
「あゝ何故まあ私達は斯うだらう。かはい相に、
いろんなことに苦勞をおしだねえ。」

「仕方がないんだ。」とわれは俯向きぬ。

「何うしてまた、お前さんを可愛がつてあげたいものは、こんなにふしあはせなんだらうね。小六さんだつて、あんな氣の強い人だつたけれど、何んなにかお前さんを可愛い、可愛いツて、何時も言つたらう。それが如彼だし。」

「いままたお雪さんだつて、然うぢやあないか。お前さんも戀しがつてるし、むかうでもそんなに思つて居るものが、飛んだ、お婿さんを娶つて又さうだし……」

小親が口籠りて吐くいきに、引入らるゝやう心細く、

「姉さんは何ともありやあしないだらうね。」

「え。」

「姉さんは何ともなからうね。」

「誰？ え、お雪さんかえ。」

「いゝえ。」

「私？」

われ頷きぬ。小親は襟に首垂れつゝ、

「私、私なんざあ、何うせ矢張礫にでもなるんだらうさ。親方持ちだもの、そりや斯うして動いてる

内うちや可いいけれど、病びやうき氣きにでもなつた上うへ、永ながく煩わづらひで
もしようもんなら、大たい概がいさきが分わかつてるわね。」

「詰つまらない、そんなことが。」
と勢いきほひよく言いひたれど、力ちからなき聲こゑなりしよ。

「いゝえ、算つもつても御ご覧らん、小ねえ六さんさんなんざ、いま
でのお禮れいしやう心こころで据すゑて置おいたつて可いいんぢやあないか。
私わたしも世せ話わになつてるし、内うちのは大たい抵てい皆みんな小ねえ六さんさんに仕し
込こまれた女ひとだもの、座ざを此これまでにしたのは皆みんなあの女ひと
の丹たん精せいぢやあないか。寝ねさして置おいて、謠うたひを教をしへさ
したツて一ひと廉かどの役やくには立たつのに、お金かね子ねだといや直す
ぐあれなんだもの。考かんがへて見みりや心こころ細ほそいよ。」

思おもはず涙なみださしぐみぬ。十とと年せの末すゑはよも待またじ、い
ま早はや渠かれは病やまひあり。肩かた寒さむげに悄しれたる、其その状さまぞ瞻みまも
らるゝ。

「姉ねえさん、私わたしは、私わたしは何どうなるんだらうね。」
小こ親ちかハツとせし風ふせ情せいにて、顔かほをあげしが又またうつむ
きぬ。

「堪かん忍にんしておくれ、もう私わたしや然さういはれると、申まを
譯わけのしやうがないよ。つい、手て前まへ勝か手たで、お前まへさん
を私わたしが處ところへ引ひ張ばつて置おいて、こんなに甲か斐ひ性しやうがない

んだものね。あの時お雪さんの方へ行つておいでなら、又こんなことにならなかつたかも知れないものを。つい何だか、お前さんをば人ン處へやりたくなかつたので、……。それも分別がある人なら、そりや、私とお前さんと両方で半分宛悪いんだから可いけれど、東西もお分りでなかつたものを、こんなにしてしまつてさ。そして心配をさせるんだから皆私が悪いんだね、本當に、もう何うしたら可からうね。」

「太く激したるやうなりき。さりとは思ひ懸けざりし。心も急きて、
「何だね、何も、そんな氣で言つたんぢやあ無いんだのに。」

四

「いゝえ、お前さんは屹と腹を立つておいでだよ。堪忍して下さい、よう後生だから。毎日々々果敢いことが有るけれど、お前さんの顔を見たり、ものをいふのさへ聞いてれば、何にも思はないで、私や氣がはずむんでね、ちつとも苦勞はしないけれど、そりや私の、身勝手だつた。御免なさいな。」

と身を顫はして涙を呑む。われは其膝おさへたり。「姉さん、何が氣に障りました。何だつて、私がそんなこと思ひます。宿なしの、我まゝものを、暑さ、寒さの思ひもさせないで、風邪ひとつおひかせでない。お母さんに別れてから、内に居ちやあ知らなんだ楽しいことも覚えさして下すつた。伯母さんと居た時は、外へばかり出たかつたに、姉さんと斯う一緒になつてから、些とも樂屋の外のこととは知らなくつて濟むやうにして、こんなに育てゝおくれたもの、何が私に不足があるえ。そりやお雪さんのことは……何だつたから、だから、謝罪つたぢやあないか。先刻云つたのは少ともそんな氣ぢやありません。何だか心細い事おいひだから、嘘にも

そんなこと云つて私を弱らして下さるなつて、然ういふつもりだつたのに、悪く取つたのかね、まだ胸にやあ濟まないかい。」

「継りつきて、

「ひがむんだね、あゝ、つい、あゝもしてあげよう、慙うもしてあげて、お前さんの喜ぶ顔が見たいと思ふことが山ぼどにあるけれど、一ツも思ふやうにならないので、それでつい僻むのだよ。分りました。さ、分つたら、ね、貢さん、可いかい、可いかい。」

「だつて餘りだから。」

「ほんとはお前さんが何てつたつて、朝夕顔が見て居たいの。然うすりやもう私や死んだつて怨はないよ。」

「まあ！」

「いゝえ、何の、死んだつて、賣られたつて、世物になつたつて、何うしたつて構ふものかね。私や、一晩でもお前さんと慙うして居られさへすりや。」

「そんなこと云つちやあ厭だ。」

分れて坐したり。

「ぢやあ、もう詰らない事はいひツこなし、氣を確乎して、私が屹度お前さんに心配はさせないよ。

其かはり私が煩つて、悲しいめにあふことが――
あつたらばね。」

また其聲を曇らせしが、

「甘えさしておくれ。可いかい。一寸でもお前さんに甘えさして貰ひさへすりや、あとは何うなつたつて、構ふものか。為たいやうにするが可いや。もう／＼、取越苦勞なんざしないで置かうね。」

「あゝ。」

「極めた！」

急に坐り直して、

「あら、もう火が消えたよ。」

小親はいそ／＼灰のなか搔探して、煙管取つて上げたるが、ふと瞳を定めて、室の隅、二處見廻したり。

「おや！鳩は何うしたらう。」

われもまた心着きぬ。さきに一たび姉上のことを思ひ斷たむとしたりし折、廣岡の家に悲しき叫び聞

えしは、確たしかに忘わすれず、其人そのひとなりし。われノとおな
じに彼かの猫ねこの鳩はとくはへしを見みたまひしならむとのみ、
假かりに思おもひ棄すてたれど、或あるひは然さもなく、何なんら等らかの
憂うきめ目に合あはせたまふならずや。酷むじき養やうし子のありとい
へば。また更さらに胸むねの安やすからず。

小親こちかは尚なほ頻しきりにあたりを見廻みまはして、

「變へんだよ、一寸ちよいとお前まへさんも見みたらうね、何なんだか私わたしや茫然ぼんやりしてたが、たしかあの猫ねこが鳩はとをくはへて飛込とびこんだつけね。變へんな氣きがするよ、つい今いましがたの事ことだつた。」

「あゝ、私わたしはまた、又またいふと何なんだらうけれど、お雪ゆきさんの（あれツ）てつた聲こゑが聞きえたやうで

ね。」

「氣きのせみだよ、そりや氣きのせみだらうけれど、はてな、一體いったい何處いどこから飛込とびこんだらうね。」

「井戸いどの處ところさ。」

「井戸いどだえ……」

わが顔かほの色いろ見みて取りたり。小親こちかは寂さびしき笑あみを含ふくみて、

「可いいよ、何どうせ心配しんぱいをさせないと言いつたこつた。貢みつぎさん、ついでに其その心配しんぱいもさせないから、もう案あんじないが可いいよ。」

「何なんの心配しんぱいさ。」

「お雪ゆきさんのことさ。」

「その事なら、もう。」

「いゝえ、然うぢやあ無いよ、一旦は何、私だつて、先刻のやうに云つたけれど、お前さんの心配をするのだもの、其上、何うせ、こんなからだゝから、お前さんさへ愛想をお盡しでないことなら、もう何んなにでも私や成らうわね。構ふものかね、何に構やあしない。」

「恚る女に何とて然ることをさせらるべき。わが心はほど定まりたり。」

「そんなに云つておくれたと、なほ私は立つ瀬がない。お雪さんも何だけれど、姉さんが何だもの。」

「何だえ、貢さん。」

「何でもいゝよ。」

「可かありません。」

「可かありませんたつて、何もわるいこつちやあない。」

「ぢやあまあ然うさ。しかし何うにかするよ、私や、其まんまにしちやあ置かないから。」

「あすのこと・・・そして姉さん冷えちやあ又悪いだらう。」われは獨り自由にものおもはむと

欲せしなり。

小親は軽く頷きつゝ、

「また心配をさしちやあ悪いね。」

「だからさ。」

「あい、ぢやあ、お前さんもおやすみだと可い。」

襖引合せて立上れり。

「しのぶや、……む、もう寝たさうな。」

戸口にて見返りながら、

「貢さん、床は私が取つてあげよう。」

「なに、構はないよ。あとで敷かせるから。」

打うなづきさま微笑みたり。

「邪魔だつたら、あつちへおいで、稲ちゃんとして寝ませう。」

「のちほど。」

「それぢやあ……」

とて立出でたる、後姿隣の室の暗きなかに隠れしが、裾花やかに足白く、する／＼と取つて返して、

「貢さん！」

顔をあげてぞ見たる、何をか思へる、小親の、憂

慮かはしげなる面色おもゝちなりしよ。

「また、鼠ねずみとでも話はなしすのかね。」

「考かんがへてるの。」

「そんなこと云いはないで、鼠ねずみとたんとお樂たのしみ。

ほゝゝ、私わたしは夢ゆめでも見みませうや。」

と横顔よこがほみ見せて身みをなゝめに、此方こなたを見みてなほ立たちたりしが、ふと心着こゝろづき耳傾みみかたむけ、

「あら！ 狐きつねが鳴ないてるよ。」

と、あだなる聲こゑにていひすてつゝ、すら／＼と歩あゆみ去さりぬ。

あれといふ聲、**■**呀と姉上の叫び給ひしと、わが
 覺ゆる聲の、猫をば見たまひて驚きたまひしならば
 可し。さなくて残忍なる養子のために憂目見たまひ
 しならばいかにせむ。それが、あらぬかとのみ思ひ
 悩みつゝ、われは夜半の道を行くなりき。

小親と同一樂屋に居て、其顔見つゝありては、わ
 れ餘りに偏して、單ものに驚かせたまひしよと思ひ
 棄つるやうになり勝なればぞ。

窓を透して、獨居の時、彼の可哀に苔生ひたる青
 楓の材を見れば、また姉上の憂目を訴へたまひしが
 如く思はれつゝ、心太く惑ひて腦の苦しきが、孰れ
 か是なる、孰か非なる。わが小親を賣りて養子の手
 より姉上を救ひ参らせむか、はた姉上をさし置きて、
 小親とゝもに世を楽しく送らむか、いづれか是なる、
 いづれか非なる。あはれわれ此間に處していかにせ

むと、手を拱こまぬきて歩あるくなりき。

しづかに考かんがへ決さだむとて、ふら／＼と假かりこ小屋やを。小こ親かが知しらぬ間まに出いで、此こ處ゝまで來きつ。山やまの手ての大おほ通どほりは寂せきとして露ゆつひや冷やかなり。

路みちすがら如い何かなるものにか逢あひけむ、われは心こころ着つかざりし。四あた邊りには人ひとの往ゆき來く絶たえて、大おほ路ぢの片かた隅すみに果くだ物もの賣うりの媪おうな一ひとり露と店りて出でて残のこりたり。三さん角かく形なりの行あん燈どんにかんてらの煤ばい煙えん黒くろく、水みづ菓くわ子わしと朱しゆの筆ふで以もて書かいたる下したに、栗くりを堆うづたか、蜜みかん柑かん、柿かきの實みなど三みツ五いつツづ、並ならべたり。空そらには月つきの影かげいと明あかきに、行あん燈どんの燈とも幽しなれば、其その果くだ物ものはみな此こ方なたより小ちひ丸まるく黒くろきものに見みゆ。電でん信しんの柱はしら長ながく、斜ななめに太ふとき影かげの横よこうたるに、ふと立たち停どまりて、やがて跨またぎ越こえたれば、鳥とりの羽は音おとして、高たかく舞まひ上あがり。星ほしは降ふる如ごとし。あなやと見みれば、對たい岸がんなる山やまの腰こしに一ひとツ消きえて、峰みねの松まつの姿すがた見みえつ。われは流ながれに沿そうたりき。

岸きしには推おしならべて柳やなぎの樹き植うゑられたり。若わか樹かきの梢こずえより、老おい樹きの樹この間まに、居あ所どころかはる／＼、月つきの形かたかゝ

らむとして、動くにや、風の凪ぎたる柳の枝、下垂れて流れの上に揺めきぬ。

來懸る人あり、すれ違ひて振向きたれば、立停りて見送るに、われ足疾に通り返ぎつ。

柳は早うしろの方遙になりて、うすき霧のなかに灰色になりたる、ほのかに見ゆ。松の姿の丈高きが、一抱の幹に月を隠して、途上六尺、隈暗く、枝しげき間より、長き橋の欄干低く眺めらる。板の色白く、てら／＼と對なる岸に懸りたり。

其橋の上に乗らるやう、上流の流れ疾く白銀の光を浴び、蛭りに蒼みを帯びて、兩側より枝蔽へる木の葉の中より走り出で、颯と橋杭を潜り抜け、來し方の市のあたり、ぐわう／＼と夜深き瀬の音ぞ聞えたる。

わが心は決らで、とかうして其の橋の袂まで來りたり。ついでなればと思ひて渡りぬ。

木津は柿の實の名所とかや。これをひさぐもの、

みなむすめ
皆女にて、市より凡そ六七里隔たりたる山中の村よ
り此橋の上に出で来るなり。夜更けては歸るに路の
ほど覺束なしとて、商して露店しまへば、其まゝ寝
て、夜明けてのち里に歸るとか。紫の紐結びつゝ、
一様に眞白き脚絆穿きたるが、足を縮め、筵以て胸
を蔽ひ、欄干に枕して、縦横に寝まりたる乙女等五
七人、其なるべし。盡く顔に蓋して、露を厭へる笠
のなかより、紅の笠の紐、二條しなやかに、肩より
橋の上にまがりて垂れたり。

小親も寝たらむ、と此處にて思ひき。

われは一足立戻りぬ。あれといふ聲、**■**呀と叫び
たまひし聲、いかで其まゝに差置きて、小親と樂し
く眠らるべき。

いま少し、いま少し、假小屋と廣岡の家と楓の樹
と、三ツともにある處に、いま少し、少しにても遠
く隔りたらば、心の惱ましさを忘られむ。

渡り越せば、假小屋とハヤ川一ツ隔りたり。麓
路は堤防とならびて、小家四五軒、蒼白きこの夜の
色に、氷のなかに凍てたるが、透せば見ゆるにさも
似たり。月は峰の松の後になりぬ。

坂道にのぼりかけつ。頂にいたりて超然として一
眸のもとに瞰下さば、わが心高きに居て、ものよく
決むるを得べしと思ひて、峰にのぼらむとしたるな
り。

歩を攀づる足のそれよりも重かりしよ。搔い撫づ

る掌を、吸ひ取るばかり、袖、袂、太く夜露に濡れ
たり。

さて暗き樹の下を潜り、白き草の上を辿り行く。
峰は近くなりぬ。

路の曲りたる角に石碑あり。蓮の花片の形したる、
石の面に、艶子之墓と彫りたるなり。貴き家に生れ
し姫の、繼母に疎んじられて、家をば追はれつ。こ
のあたりに隠れすみて里の子に手習教へて居たまひ
しが、うらわかくてみまかりたまひしか、老いた
る人の常に語る。苔深き墳墓の前に、桔梗やらむ、
萩やらむ、月影薄き草の花のむら生ひたるのみ。手
向けたる人のあとも見えざるに、われは思はず歩を
留めぬ。

あはれ廣岡の、姉上は、われにいかなる女ぞ。小
親をだに棄つれば救はるべきをと、いと強く胸を拍
つて叫ぶものあり。

草に坐して、耳を傾けぬ。さま／＼のこと聞えて、

ものゝ音響き渡る。脳苦しければ、目を眠りて靜に居つ。

やゝ落着く時、耳のなかにものゝ聞ゆるが、しばし止みたるに、頭上なる峰の方にて清き謡の聲聞えたり。

松風なりき。

あまり妙なるに、いぶかしさは忘れたるが、また思ひ惑ひぬ。ひそかに見ばや、小親を置きて世に誰かまたこの音の調をなし得るものぞ。

身を起こして、坂また少しく攀ぢ、石段三十五階にして、彼の峰の松のある處、日暮の丘の上にぞ到れる。

松には注連縄張りたり。香を焚く箱置きて、地上に圓き筵敷きつ。傍に堂のふりたるあり。廻廊の右左稻かけて低く垣結ひたる、月は今其裏になりぬ。

謡は風そよぐ松の梢に聞ゆ、とすれど、人の有る
べき處にあらず。また谷一ツ彼方に謡ふが、この山
の端に反響する、それかとも思はれつ。試みにソと
堂の前に行きて　ー　われうかゞひたり。

の 伸びあがりて密にすかしたれば、本堂の傍に疊少
し敷いたるあり。おなじ麻の上下着けて、扇子控へ
たるが四五人居ならびつ。こゝにて謡へるなりき。
釜かけたる湯の煙むら／＼とたなひく前に、尼君一
人薄茶の手前したまひぬ。謡の道修するには、かゝ
ることもするものなり。覚えあれば、磴音立てゝ此
の静さ損なはじと、忍びて退きぬ。

山の端に歩み出でつ。

唯見れば明星、松の枝長くさす、北の天にきらめ
きて、またゝき、またゝき、またゝきたる後、拭う
て取るやう白くなりて、しら／＼と立つ霧のなかよ
り、麓の川見え、森の影見え、やがてわが小路ぞ見
えたる。襟を正して曰く、聞け、彼處にある者。わ
が心さだまりたり。いでさらば山を越えてわれ行か

む。慈^{いづくし}み深^{ふか}かりし姉^{あねうへ}上、われはわが小^こ親^{ちか}と別^{わか}るゝ斯^こ
の悲^{かな}しさの其^{それ}をもて、救^{すく}ふことをなし得^えざる姉^{あねうへ}上、
姉^{あねうへ}上^{かへで}が楓^{かへで}のために陥^{おちい}りたまひとし聞^きく、其^{そのまじやうくう}境遇^{きんぐう}に報^{むく}
い参^{まゐ}らす。

【完】